
箱入り娘

うゆ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

箱入り娘

【Nコード】

N9893F

【作者名】

うゆ

【あらすじ】

「白雪、早く大きくなって綺麗なってくれよ」…なにも分からな
い白雪と一人の男。白雪を中心に巡る物語。果たして彼女は周りと
差異なく育つことができるのか？

第1話：二人の在り方

1

そこは、縦横3メートルほどの畳の部屋だった。

その部屋には実用性に富んだものはなく唯一あるものとするれば、壁際にたくさん置かれたぬいぐるみだった。

壁際といえども壁に窓はなく外からの日光はこの部屋には射さず、代わりに人工的な電球の光が部屋を照らしている。

しかし、その部屋の空気は濁っているわけでも息苦しいわけでもなく、むしろ生活するにあたって適度な温度と湿度になっていた。

中央に敷かれた、敷布団。窓のない部屋。部屋を覆うたくさんぬいぐるみ。

そして．．．その中央に居座るピンク色のネグリジエを纏った人形のような一人の少女。

| . . .

2

2

どれだけの時間が過ぎたのかも分からない部屋で、少女は何かの存在に気づいたのかドアの方をジッと見つめた。

すると、少女の目先のドアがカチャリという音を立て、その後ドアがギィという不快な音を立てながら開いた。

少女はそれを待っていたかのように、ドアを開けた一人の男のもとへと駆け寄って行った。

男はドアを開いたその場で腰を屈め膝をつき、両の手をいっぱい

広げた。

そして、少女は何のためらいもなくそこに走った勢いで飛び込んだ。

「パパ、パパ、おかえり」

短い単語をつなぎ合わせ少女は男の帰りをひどく喜んだ。

「ああ、ただいま…白雪」

少女はただ男にパパ、パパとそれだけを言い続け、至福の笑みを浮かべていた。

「白雪、じゃあそろそろご飯にしようか」

優しく微笑んだ男は、目の前にいる自分に背の半分ほどしかない小さい少女を抱き抱えダイニングルームへ向かった。

「白雪、今日はペスカトーレとシーザーサラダだよ」

男の表情は先ほどと変わることなく穏やかな表情であった。

「ペス…ペス…？サラダ」

少女はペスカトーレという単語を初めて聞いたのか、その単語を最後まで言う事は出来なかった。

しかし、反対にサラダはしっかりとしたアクセントで言っており、その顔からはサラダという食べ物がどんなものか知っているようであった。

「サラダ、サラダ」

背もたれの長い椅子に座り、またもや同じ言葉を連呼する少女は地面に届かない足をバタバタとさせ、親の餌を待つ雛鳥ひなどりのように見えた。

「分かってるよ、今作ってるから待ってて」

痩せ形で身長が180cm近くある男は手慣れた手つきでパスタを茹で、その合間にサラダの盛り付けを行っていた。

白雪は目の前のテーブルに置いてある、少女と男の2つのフォークを手に持ち、その2つの大小変わらないフォークをぶつけあわせ不協な音を響かせた。

「こら、白雪何やってるんだ、やめなさい」

相変わらず笑顔な男は、いたずらをした白雪を軽く叱った。

躡^{しつけ}がすっかりしているためか、白雪は男に言われたことはすぐさまやめ二つのフォークをテーブルに戻した。

そういえばフォークで思い出したが、少し前に白雪はこの時みたい
にフォークやスプーンを使う食事の際、
自分のフォークとパパのフォークが違うと言って手をつけなかった
ことがあった。

確かにその時、白雪のフォークはお子様用の小さいものだった。

そのため男はキッチンに置いてある自分とおなじフォークを白雪の
フォークを取り換えた。

すると白雪は、男と同じものを使えるからかそれをとても喜んだ。

その時、それを見た男は白雪と同じようにとても喜んだ。

そんなまだ思い出というほど離れていない記憶を思い起こしている
うちに大体の調理が終わった。

「ほら白雪、料理が出来たぞ」

料理を見た白雪は一層足をばたつかせながら、目を輝かせた。

「サラダ、サラダ、・・・ペスカトーレ？」

白雪は先ほど男が言っていた料理の品名を曖昧ながらも思い起こし
た。だがアクセントは定まっていないようであった。

「そうだよ、サラダとペスカトーレ」

ゆっくりとした口調で英単語を教える教師のように男は白雪に新し
い単語を教えていた。

「ペスカトーレ？」

ぎこちないながらも白雪はまた新しいものを覚えた。

「そう、ペスカトーレ。それでこの細い麺は・・・」

男が最後まで言い終らないうちに白雪はフォークを手に持って彼をジーンと見つめていた。

「分かった分かった、そうだね早く食べよう」

その言葉を聞くと白雪はペアと顔に笑みを浮かべた、

「いただきます」

白雪は当たり前のようにそう言った。どうやら食事のマナーはしっかりしているようだ。

「どうぞ」

男はそう言った白雪を優しく微笑みかけ食べるように促した。

「ダメ、パパ、いただきます」

ムスツとした白雪は男の方を見て目の前の食事を食べるための手を止めた。

一瞬不意を突かれたかのように停止した男であったが、少し時間を要して白雪が何を言いたいのか分かった。

「あゝ、いただきます」

男は慌ててそう言った。

その途端、白雪は止めていた手を動かしサラダに手をつけた。

近頃、白雪はものすごいスピードで成長しているように感じる。

特に心が成長しているように思える。しかし、まだそれは身体的な面には反映されないらしい。

本当に白雪の成長には目を見張るものがある。ちよつと前までは全然話せなくて動き回ることもできなかったというのに・・・

白雪は真っ直ぐ成長して、綺麗にな人になって貰いたい。

「・・・パパ、これ」

男はその言葉で思想から現実に戻り、白雪がフォークを持つ手の反対の左手で指す物を見た。

それは、先程男が作ったペスカトーレであった。

男は白雪にスパゲッティを食べさせたことがないという事に気づき、
そういえばといった表情で食べ方の手本を見せた。

「白雪、これはね、こうやってクルクルってやって食べるんだよ」
男は目の前の楕円形のお皿に盛られているスパゲッティをフォーク
で巻き取り口に運んだ。

それを見た白雪は自分のお皿に向き合い男と同じようにフォークを
クルクルと回した。

それを持ち上げると、赤みを帯びたスパゲッティは白雪のフォーク
に少量巻きついていた。

白雪は勿論それを口に運んだ。だが、まだ初めてという事でしっか
りと巻きついていないスパゲッティは、
フォークの隙間から抜け出すようにスルリと白雪の膝の上に落下し
た。

それを見た男は近くのタオルを台所で濡らして、白雪の膝に落下し
たスパゲッティとソースを拭きとった。

しかし、スパゲッティは白雪のピンクのネグリジェにうすく赤いシ
ミを残した。

「パパ、ごめんね・・・」

白雪は申し訳なさそうに男に謝った。

「うん、よく言えた。偉い偉い」

男はネグリジェを汚したことを怒ることはせず、やはり優しく白雪
がちやんと謝ったことに対して褒め、

申し訳ないような表情を浮かべている白雪の長く伸び、シルクのよ
うに柔らかい髪を左の手でゆっくり撫でた。

「・・・ごめんね」

「もういいよ白雪」

男は小さく謝る白雪をゆっくり撫でながらなだめた。

「よし、白雪、パパが食べさせてあげようか？」

そんな謝らなくていいんだよ、と思った男は白雪にスパゲッティを

食べさせようとした。

「嫌、白雪がやる」

白雪は自分の力で頑張ろうとしていた。今まではすぐパパに頼んでいたのに、またこれにも男は驚いた。

「偉いよ白雪」

そう褒めると、白雪は褒められたのが嬉しいのか男の方に顔を向けてニイと笑った。

そして白雪は目の前のスパゲッティをフォークで巻き取り、ぎこちないながらもしっぴかりと口に運んだ。

「おいしい」

「そうか、それは良かった」

男は、またフォークとは別の手である左手で白雪の紙を撫でた。

「パパ、あーん」

そう言くと、白雪はフォークをお皿に置き、男の方を向いて口を開けた。

どうやら白雪はやっぱり男にスパゲッティを食べさせてもらいたいらしかった。

成長していると思ったが、やはりこういった所はまだ幼いのだなとつくづく思った。

「分かったよ白雪、ちょっと待っててな・・・はい、あーん」

男のフォークに適量巻きついているスパゲッティを白雪は口を広げて頬張った。

「おいしい！」

白雪はとても喜んだ。

「そっだね」

男も一緒に微笑んだ、・・・そう、まるで本当の家族のように。

男は当たり前のように白雪のピンク色のネグリジエをゆつくりと脱がして、それを洗濯機の中に放り込んだ。もちろん白雪は、年齢が年齢なためブラジャーは着けておらず、膨らみの持たない胸があらわになっていた。

そして、男は白雪の肌に着けている最後の衣服であるショーツを、腰を屈めてゆつくりと下ろして行った。

白雪はそれに合わせて足を上げ、ショーツはネグリジエ同様洗濯機に放り込まれた。

「一緒に、お風呂」

白雪は浴室の扉を開けようとしていた。

「そうだね、今日も綺麗に洗ってあげるよ」

そう言うと、男は手際よく自分の衣服を脱いでいきそれらを1つ1つ洗濯機に放り込んだ。

「じゃあ入ろうか」

「うん」

浴室への扉が男の手によって開かれると、白く曇った蒸気が二人を出迎えてきた。

そして二人は客のようにそのまま浴槽に浸かった。

「・・・ああ・・・気持ちいい」

温かい液体が男の体を包み込んだ。

浴槽はさほど大きくなく、白雪と男は向き合う形で浸かっていた。しばらくすると、男は白雪に浴槽から出るように促した。白雪が浴槽から出るのを確認すると男も続いて出た。

「うー、洗って」

そう言うと白雪は、浴槽のすぐ隣にあるお風呂用のプラスチック製のイスに腰を掛けた。

「はいはい」

男はタイルの壁のフックにかかっているボディタオルを手に取り、すぐ近くに置いてあるボディソープのボトルをプッシュし

ボディタオルを泡立てていった。

それはすぐ泡立ち、すぐさまイスに座っている白雪の背中にあてがわれた。

男が体全体を洗い終ると、次はシャンプーを白雪の長い髪に含ませた。

「目を瞑って、白雪」

白雪はシャンプーがあまり好きではないのか、目をギュッときつく瞑った。

白雪の髪は泡で覆われていき、だいたい全ての部分を洗われて泡まみれになった白雪は、男の手によって泡を水で流し落された。

「よし、きれいになった。じゃあもう一回暖まるうか」

「うん」

その後、男と白雪は浴槽でおしゃべりなどを交わし、浴室をあとにした。

4

私の隣で寝息をたてているいる白雪、お前は母親のように綺麗に育つてくれるだろうか。

私はお前の事が愛おしくて仕方がないよ。最近はお前の成長を見ているのがとても楽しい。

自分で考えて何かを言ったり、行動で示したりして私に何かを伝えようとする姿。

少し前まではパパとしか喋れなかったのに、いつの間にかいろんな言葉を覚えていた。

おまえが赤ちゃんの時、最初は何をしたらいいか何も分からず育児専門書を何冊か買って、それを読みふけていた。

そしてその後は、紙おむつ、哺乳瓶、粉ミルク、ベビー服、おしゃ

ぶり・・・、いろんなものを買った。

泣いているときは哺乳瓶を口に当てたり、オムツを確認したり等して、後は育児書と勘だけで頑張っていた。

…白雪、早く大きくなって私を満足させておくれ、早く、早く。

私だけの君になってくれよ、君にとっての世界は私だけなのだから。

誰にも君を渡さないよ、拾ったのは私なのだから。

|| || || || || || || ||

そして男は普段と変わらぬまま、大きめのベッドに白雪と寄り添うようにして就寝した。

第1話：二人の在り方（後書き）

まだ、お話をあまり書いたことがないので出来はそこそこですが、ここまで見てくださった方はありがとうございます。

出来れば、2話目にすぐに取りかかろうと思うのですが、何せ試験が近いものですから

1カ月後ぐらいの執筆になってしまいかもしれません。

その後はたくさん書いていきたいので、どうかよろしくお願いします。と、いうことでうゆでした

第2話：彼女との出会い

そういえばあれはいつの話だったかな・・・そうか大体今から6年前ぐらいだったかな。

そうだよ・・・いつの間にか6年も経っていたんだな。

白雪と会ったのはそんな前だったか、赤子だった頃が昨日のように思えるよ。

あれは雪がたくさん降っていた時の事だったな。

|||||

私は誕生日だというのに独身という身分ながら、やはり誰も祝ってくれないことで、

いつも通り車でいきつけのショッピングモールへと向かっていた。

今日は、今年の中で一番ではないかというぐらい雪が吹雪いていた。そのため私の車の屋根とフロントガラスにはたくさんの雪が積もっていた。

家を出る前にフロントガラスの雪は取り払い、最初のうちは視界が確保できていたのだが、

車に乗ってショッピングモールに向かっている最中に赤信号のためでブレーキを踏んだせいか、

止まった勢いで車内から見える雪景色は積もりに積もった雪が屋根からフロントガラスに滑り落ちたことによって遮られ、暗闇となっ

た。

そのため私は信号が赤から青へと変わる前に、すぐさま車から飛び出し雪を取り払おうとした。

しかしその時、私は対向車が近づいているという事に気づかず、車を飛び出したため、目の前には車が迫ってきていた。

なんとか対向車の運転手はぶつかる直前にハンドルをきったため、私は大事には至らなかった。

だがその代りにたくさん車は私に向けてクラクションを放つわ、雪を取り払っている間に信号が青になり今度は後の車からクラクションを鳴らされる等、本当に散々であった。

しかし、住宅街に降り注ぐ雪は銀世界を私に見せてくれたようで悪いものではなかった。

そうこうしているうちに私はショッピングモールの地下駐車場に車を止め、入口付近に設置されてる買い物カゴを手に取り店内へと入っていった。

もちろん私はそんなに料理は出来る方ではないので、冷凍食品やカツプラーメンなどを買い込む。

だが最近では自炊にもチャレンジしているため、基本的な食材も買い込む。

その理由は簡単だった。テレビ番組でやっていた料理番組で自分でも出来るのではないかという疑問が浮かび、試しにやってみたところ意外にも楽しかったためチャレンジをしている。今ではそれは趣味のひとつになりつつある。

だが、結果的にはカツプラーメンは好きなためそこは譲れないものがある。

カツプラーメンの種類では、やはり無難にホームラン軒の味噌ラーメンが一番うまいと思う。

そんな事を考えながら誕生日である今日の夕食の食材を買い込んでいた。

その後はショッピングモール内に設置されている書店に向かい、新作の小説やその少し前の物を何冊か買い込む。

読書も私の趣味であり、独身の私にとって映画鑑賞に並ぶほど楽しいものだ。

書店は思っていたよりも閑散としており、人はまばらにしかいなかった。

そして私は両手に提げた買い物袋を見つめ、地下駐車場に止めてある車のもとへと向かうのであった。

私が自動ドアをくぐり抜け地下駐車場に戻ると、外が大雪なため人があまり来ないという予想に反して、

駐車場は色とりどりの車でごった返していた。

もちろん私はそんな事は気にせず自分の交通手段である車のもとへ向かって行った。

そして、とても広大な地下駐車場の端に位置する自分の車の元に到着するとやはり隣には車が連なっていた。

別に何を思ったわけでもないが、私は隣の車の車内を見渡した。

その車は普通自動車で車内は私の車と比べると小奇麗な方であった。だが車の後部座席には、なんと小さな女の子の赤ん坊がすやすやと眠っていた。

何を思うわけでもなく私はそれに魅入っていた。

すると、頭の中に何かがよぎったような不思議な感覚に襲われた。

頭の中の私が駐車場内の自分の車の横に立っている私に向かって何かを囁いてくる。

『この子を家に連れ去って自分が育てれば、奴隷とひけをとらない

従順な娘になるのではないか？』

だが、良心の私はそれを許さない。

『この子をさらっていったい何があるというのだ、仮にこの子をさらったとしてもその後はどうする？どうやって誰にも悟られずに暮らす？』

どうやって世話をする？結局最後には捕まるのがオチだ』

しかし・・・、もはや悪魔に魅入られてしまった私はその欲望に打ち勝つことができなかった。

無意識のうちについてのか手に提げられていた買い物袋が地面に落下しており、袋の中に入っていた冷凍食品やカップラーメンが散乱していた。

他には8個入りの卵が内用物をぶちまけて、パックの中身をドロドロとした黄身と卵白が彩っていた。

そして買い物袋を放して何も手にしていない右腕は、既に自分の隣にある車に手を掛けようとしていた。

その瞬間、悪魔の方の私が告げ口をした。

『素手で取っ手を触るんじゃない、そして車内には証拠物資を何も残すな。最後に、近くに防犯カメラがあるかを確認しろ』

舞い降りた悪魔は地獄の業火とはうって変わって冷たく、私にとっても冷静に指示をくだしていた。

私は何食わぬ顔で辺りを見渡した。幸か不幸か周りには防犯カメラの姿はどこにも見えず、さらに人影すら見えなかった。

地下駐車場は水をうったように静まり返っており、私は何の躊躇ちゆうしゆもなく長袖で覆った手を車の取っ手に掛けていた。

すると、車は鍵という常識を取っ払ってガチャリという音と共にすんなり私の侵入を受け入れた。

車の中は暖房が利いているためか外の温度と比べ適度に暖かかった。その後の私の行動は素早く、座席やそれ以外の物に手を付けぬように慎重に赤ん坊を抱き抱え、

扉がガバリと開いている自分の車の中にその子を置いた。

死んだように眠っている赤ん坊はもちろん目を覚ますことなく私の車の後部座席に運び込まれた。

そして私は辺りを気にしながら先ほどまで赤ん坊が眠っていた車の扉をそうつと閉め、散らばっている食材等を袋に書き集めて助手席に乗せると、

私は反対側に回り、運転手席に乗り込んだ。

後ろには何も知らな小さな赤ん坊、今さら私はこの子を元の場所に戻す気はない。ここまで来てしまったら取り返しがつかないのである。

「じゃあ・・・行こうか」

悪魔が乗り移った私はそう言い残し、車のキーを差し込み車を発進させた。

家に帰る際は特に何も起きず、ただ吹雪いている雪たちが後部座席で寝ている赤ん坊を歓迎しているようにも思えた。

住宅街の一軒家に住んでいる私は、肘にだらりと提げられた買い物袋とその先の両手に抱えられている赤ん坊の重みを感じながら玄関前のプレートに記された『坂東』という文字をあとにして自宅へと入って行くのであった。

やはり自宅に入ると安心感が訪れ、先ほどまで不安でいっぱいだったという事を教えられる。

私はすぐさま冷え切った室内を暖めるため年季の入ったストーブのスイッチを入れた。

そして両手に抱かれた赤ん坊をソファに寝かせ、玉子の割れたパ

ツク以外の食材を冷蔵庫に整頓しながら置き、
カップラーメンを近くのかごの中に放り込んだ。

そうしている間にも次第に部屋は暖まっていき、冬の寒さから解放される。

そして残った赤ん坊を見据え、本当に誘拐してきてしまったのだと実感する。

数日後にはテレビなどでも報道されるのだな、と先の事を考えながらふと赤ん坊の靴下の裏を見ると、そこにはひらがな小さく『しずな』と書かれていた。

それがこの赤ん坊の名前なのだろうと瞬時に判断する。同時にこの家で暮らしていくにあたって名前が必要だなと思った。

さすがにその名前でもこの子呼んでいくのは抵抗があるため私はこの子の名前を考えることにした。

しばらくした後、外の景色を思い返しているとこんな名前が思い浮かんだ。『白雪』。

安直な考えだ、ただ、今日の空気と同化して無くなってしまいそうな淡い雪がとてもきれいだったからである。今さら自分のセンスのなさに苦笑する。

結果的にこの赤ん坊は『しずな』ではなく今日から『白雪』となって生まれ変わるのであった。

今日は私の誕生日であるが、狂った神のプレゼントはどうやら他人の子供であるこの『しずな』という女の子の赤ん坊らしい。

哺乳瓶を白雪の口にあてがっている手と別の手で、何気なくテレビをつける。とニュース番組がやっており、

そこには報道キャスターが事件の内容を語っていた。

『秋田県大仙市内のショッピングモールにて生後8か月の星野静奈ちゃんは何者かによって誘拐されました。』

被害者の母親である星野深雪さん証言によると、短時間で車に戻ることにしていいため、車の鍵をかけ忘れてしまったとのこと。そのため車内は荒らされた形跡は一切なく、後部座席に座っていた静奈ちゃんは忽然と姿を消していたようです。

検察側も犯人逮捕に向けて現場周辺を捜査している模様です。・・・
それでは次のニュースです。』

そのニュースを聞き私はクツクツという笑い声をたてた。

つまり、検察側もなにも証拠をつかめていないということなのだ。と私は悟った。

そしてなにか大きな証拠物資が見つからない限り、警察も大きく出られないだろうと私は踏んだ。

あるわけないじゃないか、私は誘拐にあたって細心の注意を払って全てをこなしたのだから。

だが、家宅捜索で家に来られたら部屋に置かれている不自然なベビー用品に気付いてお終いかもしれない・・・数年だ、数年我慢すれば世間はそんな事を気にしなくなる。

ただ私は家に赤ん坊がいることを誰にも口外せずに普段通りに過ごせばいいだけなのだ。

私はこの日に決心した。絶対に捕まらずにこの白雪をわたしだけのため育てると。

そんな中、哺乳瓶をあどけない表情で欲している白雪は男が何に對して笑っているのか分からないでいた。

第2話・彼女との出会い（後書き）

1カ月あきますと言いつつ意外と速く更新してしまった。どうも書きたかったんで、勉強もやりつつですが。とりあえず今回は1話の謎を回収していく感じですね。この後も風にやっていききたいと思います。

・・・会話が殆どないと書きづらいうことが分かりました。

第3話：葬儀前夜

彼女の名前は………白雪。

彼女はほとんどの時間を光の射さない小部屋で過ごしている。

だが結して無理やりそこに入れられている訳ではない、むしろ彼女はその場所を好んでいる。

人工の光が照らす、他の部屋とは一風違った畳の部屋。

ほとんどの時間をそこで過ごしていると言ったが、彼女は保育園や小学校は行っていない。

彼女は知る由もないが、誘拐された身のため外に出ることは許されない。

そもそも彼女は学校や図書館、公園といった公共の場所を知らない。井の中の蛙とはまさにこの事である。

外を知らない、自分が認識しているのはこの3DKの家の中のみ。そして何故彼女がその場所を好んでいるのかと言えば、この狭い世界で唯一の友達がいるからである。

その友達というのは部屋に数多く存在するぬいぐるみたちのことだ。そのぬいぐるみたちは男の手によって2週間に1度か2度の頻度で増え続けている。

ぬいぐるみの種類は、うさぎ、ワニ、ライオン、犬、猫等と様々でどれもかわいい姿をしている。

彼女はその全てを平等に可愛がっていた。もちろんそれは男にそう言われたからである。

彼女はどのぬいぐるみが一番気に入っている、というものが無い。それは単に良いぬいぐるみが無いという訳でなく、只動物自体を知らないのである。

例えば犬のぬいぐるみがあるとして、本物の犬は飼い主に散歩させられたり、ご飯を食べさせてもらったり、

吠えてみたり、寝てみたりと、さまざまな動きをする。

しかし彼女から言わせてみれば、犬のぬいぐるみは唯のぬいぐるみであって他のぬいぐるみとの差異は形が異なるだけなのである。そう、彼女にはそう言った物事に関する観念が無い。それは、男が支配する世界がそうであるからである。だからぬいぐるみにも可愛いという観念が無い。男から言わせてみれば可愛いぬいぐるみというのは彼女の部屋に数多く存在する“それ”ではなく、顔が整いすべすべとした肌をもち、長い髪をした白雪なのである。

「ねえ、ふう君。 あーちゃん、と仲直りした？」

「・・・・・・・・」
ライオンのぬいぐるみ、ふう君を両手で持ってジッと見つめる白雪。ふう君の顔の部分が何かに向けられ、微かにライオンの象徴であるフサフサとした毛が揺れる。

ふう君の向けられた先はうさぎのぬいぐるみ、あーちゃんであった。

「あーちゃん、どう？」

「・・・・・・・・」
あーちゃんの大きな白い耳の下にある、うさぎ特有の黒いつぶらな瞳は白雪に対して何かを訴えかけているようであった。

「そうなんだ、じゃあちゃんと、仲直りしよ」

「・・・・・・・・」

白雪は壁にもたれかかっているウサギを片手でひょいと持ち上げ、もう片方の手に握られているライオンの目の前に置く。

「あーちゃんも、ちゃんとして」

「・・・・・・・・」

白雪はうさぎの頭というより、耳に部分を軽く触ってライオンに向かって下げさせた。

「よくできました」

「・・・・・・・・」

もちろん白雪以外に喋る者はいない。

白雪はぬいぐるみたちが自分達のように喋れないという事は知らない。

自分が喋れるのならぬいぐるみたちも話せるのだと思っている。

きっと彼女の中ではぬいぐるみたちが楽しげに会話を繰り広げているのではないか？

しかし、それは彼女の知る範囲の言葉でだ。白雪がそんなように、ぬいぐるみたちも言葉が継ぎ接ぎはなのだろう。

「ふう君は？」

「・・・・・・・・」

もちろんぬいぐるみであるふう君は何も語らない。

「ほら、ちゃんと、して」

白雪は、何か悪い事をした子供を正すようにゆっくりと言った。

「・・・・・・・・」

「ちゃんと、して!」

白雪が金切り声を上げた。誰もいないこの家にその奇声を咎める者はいない。

ついには彼女なりの精一杯の力でライオンのぬいぐるみの尻尾と足を逆の方向に引っ張った。

「・・・・・・・・」

痛みなどを感じる感情さえないライオンは普通ではありえない伸び方をしていた。

次第にぬいぐるみの尻尾や足の継ぎ目の糸がブチブチといった音を立てながら切れていくのがわかる。

そして最後にはライオンの尻尾の部分が千切れた。

綿の詰まった足も糸が切れたためか、本体からだらりとぶら下がっていた。

「壊れた・・・直せない・・・パパ、パパ、直して」

誰もいないこの家ではその言葉を聞いてここに飛んでくる者はいない。

それすらもよく分からない白雪は、「パパ！」と絶叫しながらライオンのふう君を振り回す。

ぬいぐるみの形を形成している綿が破れた布から飛び出していく。

勿論それがなんなのかは分からない。唯の白いふわふわしたもの
しか認識の仕様がなない。

そして白雪は、長いことそうやっていているうちの手で掴んでいたぬいぐるみが無残な姿になっているのを見て、動きを止めた。

しかし、これといった感情を持ち合わせている訳ではないのですぐに違う事を始める。

そう、男が帰ってくるまで。

「白雪、ただいま」

男が帰ってくるると白雪はいつものように手を広げて待っている男に向かって飛びこむ。

「パパ、ただいま」

未だにおかえりとただいまの区別がつかないのか男の言葉を繰り返す。

「白雪、こういう時はおかえりって言うんだよ」

男は白雪の髪を優しく撫でる。

「おかえり!」

「よくできたね」

白雪は満面の笑みを浮かべながら男にさらに抱きつく。

「けどね、白雪」

白雪を焦らすかのように言葉をそこで止める。白雪はきょとんとした表情で男を見上げる。

「明日は少し遅くなるかもしれない」

「白雪、嫌」

すぐさま泣きそうな表情になる。だが男の表情は一向に変わらない。「今日は父親のお通夜で短く済ませられたんだけど、明日は葬儀だから色々と事情があつて遅くなるかもしれないんだよ」

「オツヤ？ソウギ？」

白雪は初めて聞く言葉がたくさん出てきたため頭がそれに追いつかないでいた。

「白雪はまだ知らなくていいよ。けど・・・明日は会う人がいるんだよ」

首を傾げてよく分からない白雪は、男をその場に残してダイニングに走って行った。

「そうだよな・・・分からないよな、明日会う人なんか。それが自分に関係してるだなんて」

誰もいない廊下に向かって呟いた声は明日会う誰かのために消えていった。

なんで、私の周りからはどんど

ん人がいなくなっていくのよ。

6年前のあの日から誰だか分らない一人の他人の手によって私の人生がすべて捻じ曲げられた。

そして4日前、交通事故によって母は亡くなってしまった。

トラックの運転手が不注意によって、赤信号なのにもかかわらず横断歩道を渡っている計7名に突っ込み

その場に居合わせた母はその事故で死んでしまった。

母を含めた4名は死亡し、残りの3名は重症の怪我を負った。

そんな大事故なのにもかかわらず裁判所はその被告人に対して情状酌量の余地があるとし、刑が不釣り合いであった。

・・・そんなやつは死んでしまえばいいのに。

明日の告別式には一体どんな人が集まるのだろうか。

せめて葬儀の時ぐらいは泣かないようにしよう。今さら落ち込んでいても仕方がない。

葬儀という事は明日はあいつも来るのか、そういえばここ何年もずっと会っていないかった。

あいつは結婚したのだろうか？・・・いや、あいつに限ってないか。私の方は、子供を失った時のショックで長い間心を閉ざしてしまっていたのまにか夫もいなくなっていた。

今では昔に比べれば落ち着いた方であるが、もし犯人が私の前に現れたら確実にそいつを殺すだろう。

ああ、静奈・・・あなたはどこに行ってしまったの。

生きているか死んでいるかも分からないというのは酷すぎる。せめて遺体でもいいから帰ってきてほしい。

警察はもうほとんど動いてくれない、私一人ではどうにもならない。誰か私を助けて。

そして、星野深雪は明日の葬儀のための喪服を押し入れから引っ張り出したのであった。

第3話・葬儀前夜（後書き）

話の輪郭が出てきたような感じなんですけど、どうなんでしょうね？
まだまだ文が拙く分かりづらい表現などありますけど、
ここまで読んでくださいますありがとうございます。どうぞいします。

次回も頑張るのでよろしくお願いします。

第4話：葬儀当日

その事を知った時はとても驚いた

誘拐事件については私が起こしたものだが、その当時はそれとは別のある事実にとても驚いた。
事件から数日後、ニユースではその誘拐事件を大きく取り上げた。
だが私は、結局警察に捕まることが無く普段通りに生活を送ることができている。

しかし、問題はその事ではなかった。

いつしかニユースには誘拐された赤ん坊の母親が生中継でテレビに映し出された。

そして、全てが繋がった。

その女の名前は星野深雪。旧姓、坂東深雪。

最初の頃のニユースでは彼女という事に気付かなかった。何しろ彼女は結婚していて苗字が変わっていたのだったからだ。

テレビに映し出された彼女を見た時、私は目を疑った。

テレビの中で『娘を返して』と泣きながら懇願している女性。それは、この世にただ一人存在する私の実の姉であったのだ。

18歳の頃あたりから一度も会っていない姉。まさかこんな形で彼女を見るなどとは夢にも思わなかった。

この家ほどではないが、意外にも世界は狭いのだなと実感した。

今日は本当に久しぶりに姉と再会することになる。

・・・今のこの状況と、あの忌々しい過去とこの誘拐さえなければ仲の良い普通の兄妹だというのに。

とにかく今日の葬式では出来るだけ会話を避ける予定だが、姉の事だからそれは無理なのだろう。

いくら私が異常といっても普通の人に対しては感情や表情を偽るなんてことは簡単なのだが、親族となるとそうはいかなくなる。どんなにうまくやっても、親族という安心感から緊張がほぐれて小さなミスが生じるかもしれない。

これは気を引き締めていかなければいけない。

じゃあ、行ってくるよ白雪。お前の本当の親に会いに。

実家で行われた告別式には、生前母と仲が良かった人やいろいろな親戚が集まった。

そして告別式に集まった人たちは、「あんなにいい家庭を持っていたのに、「可哀想に」、「とても優しい人だったのになんで」、「一人の不注意が為に」等の事を口をそろえて言っていた。

そして親族である私と姉と父と叔母が集まった人に挨拶を交わした。私の叔父はだいぶ前に肺がんで亡くなった。

原因は毎日欠かさず吸っていた煙草だったらしい、結局死ぬまで吸ってっただから仕方がない。たしか銘柄は『セブンスター』だったけな。

私が高校の時に叔父に煙草を勧められて勢いで吸ったところ、慣れていないためか思いきり咽むせて、それ以来ずっと吸っていない。

告別式では母の写真が入った額縁を持ちながら、叔母は俯き泣いていた。

たしかに気持ちは分かる、年齢からすれば自分の方が早く死んでもおかしくないというのに、

子供の方が早く死んでしまうなんて考えもしないからその分辛いんだという事が。

やはり同様に父もとても悲しんでいた、きっと事故を起こしたトラ

ツク運転手の事を憎んでいるに違いない。

普段は穏和な父もさすがにこればかりは許せないだろう。なにせこの世で一番愛しているものを一瞬のうちに奪われたのだから。そんな二人と比べて姉はあまり落ち込んでいる様子ではなかった。普段通りな表情を浮かべており、何事もなかったように取り繕っていた。

告別式は一般同様に進行していき、そして葬儀となった。

母は火葬場で火葬されることになった。

慣れない手つきで太めの箸を使い、火葬され骨となった母の遺骨を骨壺に納骨した。

骨を取る叔母の手は震えており、その場で立つことがままならないようにも見えた。

そして、事故で亡くなった母の葬儀が終わった。

「久しぶり・・・まさかこんな形で再会するとはね・・・」

一段落ついて実家から自宅に帰ろうとした私に向って姉が呟いた。

「あ、ああ・・・たしかにな」

「何年振りかしら、私達が会うのは」

冷めた目で同じく呟いた。

「さあ・・・何年だったかな、たしか高校のときだったかな」

「・・・そういえばそうだったわね、将ちゃん」

久しぶりに呼ばれた昔の呼び名に懐かしみを覚えた。

「ゆきねえ、その呼び方はやめろよ。もういい大人だろ。」

「そうかしら、そっちも『ゆきねえ』って呼んでるけど？」

私はたしかにそうだというような表情を浮かべた。

「ごめん、けど深雪とか深雪さんとか呼ばれるのも変に感じないか？」

私はさっきまで持っていたブラックコーヒーの蓋を開けた。

「いや別にそれでもいいわよ、なんかどうでもよくなってきたしさ」
「そうなんだ・・・」

姉の性格が少し変わったことに一種のもやもやを感じ、手に持った
ブラックコーヒーをグイッと飲んだ。

「へえ、あんたもそういうの飲むようになったのね。ちょっと前ま
ではオレンジジュースだったような気がしたんだけど」

前言撤回すべきだろうか、実際の所姉の性格はあまり変わっていな
かった。

「オレンジジュースっていつ頃の話だよ・・・というかさあ・・・
死んじまつたな母さん・・・」

その言葉によりその場の空気がやや濁った気がした。

「そうね・・・本当に・・・事故を起こした運転手を殺してやりた
い気持ちだわ」

姉の目には鬼気迫る殺気がこもっていた。それに圧倒されたか、私
は黙り込んだ。

「けどさすがに殺しはしないわよ、そんな事したら私まで警察に連
れてかれちゃうからね。でも・・・」

「静奈を誘拐した犯人だけは本当に殺してしまいそう・・・」
その犯人が私といたら彼女はどんな表情を見せるのだろうか、なん
の躊躇いもなく私を殺すのだろうか。

それとも警察に連れ出すのだろうか。兄妹という理由から見過ごし
てくれるだろうか。

様々な思考が私の頭の中で溢れかえっていた。

「そうなんだ・・・そういえばまだ静奈ちゃんは見つかってないん
だよ」

我ながらなんと白々しい事を言っているのだろうかと思った。

「そう、本当に死んでいてもいいから帰ってきてほしいと今でも思
っているわ。けどやっぱり生きていてほしい」

誘拐犯が誘拐した子供の母にその事について質問するなんてことは、
どこを見渡しても私だけなのではないだろうか。

「・・・静奈ちゃん、生きて帰ってくるといいね」

「ありがとう、でも警察はもうほとんど動いてくれない・・・だから私が犯人を見つけようと思ってるの」

姉は右の拳をギュツと握りしめてそう言った。

「一人でかい？それは結構大変なんじゃないかな」

「たしかにね、じゃああんたも手伝ってよ」

ここにきて予想外の事態が起きた。誘拐された子供の母が誘拐犯に向かつて助けを求めたのだ。

「犯人探しか・・・大変かもしれないけど出来る限りの事は手伝おうかな。なんたってゆきねえの命令だからね」

姉はフフと笑顔を見せた。

「ありがとうね、頼りにしてるわよ」

「けど、今から犯人探しをやって果たして犯人は見つかるのかな」

私は飲み干したブラックコーヒーを片手で軽々潰した。

こう見えても力には自信があり、少なくとも並の社会人と比べれば力がある方である。

「そうね、けど私は今からでも遅くないと思うの」

「たしかにね、少なくともまだ静奈ちゃんが生きてる可能性はあるわけだし、犯人自体は悠々と暮らしてるだろうしね」

私の言ったことは嘘ではない、全て事実なのだから。

「出来れば明日から協力してくれないかしら、休日だから空いてるでしょう」

「うん、協力するつもりだよ。けど、大の大人に休日暇でしょうって決めつけるのも失礼な気が・・・」

私は軽く苦笑した。

「だってそうでしょう、結婚してないわけだし、誰かと一緒にいるわけでもないんだから」

結婚してないという事には否定はできないが、少なくとも二人では暮らしている。

「はあ・・・ゆきねえはズバズバ言いすぎだよ、そんなことしてる

と男が逃げるよ」

その直後私はしまったという顔をし、口を手で覆った。

「男が逃げて悪かったわね、どうせ私は毒舌女ですよ」

姉は私から視線を外して言い放った。

「ごめん、悪気はなかつたんだよ。許してくれよ」

少し笑いを含みながら姉に頭を下げた。

「しょうがないな、じゃあとりあえず明日から頑張つてね」

姉はそう言い終えると私とメールアドレスの交換をしてスタスタと帰って行った。

嵐のような姉との会話を終えた私はそのまま家に帰宅しようとしたが、玄関近くに立っていた父に止められた。

「将太、出来るだけ深雪の力になってやれよ。ああ見えて深雪はな、本当はすごく弱いんだ」

父の表情がいつにもましてさらに寂しげに見えた。

「分かつてるよ父さん、出来るだけ頑張るよ」

「頼んだぞ」

父は絞り出したような声で言った。

「父さんもあんまり無理しないでくれよ、もしなんかあったらすぐこつち来てやるから」

「ああ・・・」

父は呻うめいたのか分からないような低い声で応えた。

「じゃあ、さよなら」

私は出来るだけ笑顔で振る舞い実家を出た。

閉めたドアの向こう側では父はきつと泣いているんだろうなと思っ
た。

そして私は電車を乗り継ぎ自宅に到着し
た。

「白雪、ただいま」

そう言つて玄関の扉を開けると白雪はすぐさま部屋から飛び出してきた。

「パパ、ただ・・・おかえり」

「えらいえらい、よく言えたぞ」

そう言つて靴を脱ぎながら白雪の頭を撫でる。

「ねえ、パパ、ふう君直して」

白雪は所々千切れたライオンのぬいぐるみを私に突き出してきた。

少し前にもこういつたことがあったのでその事態にそれほど驚きはない。

「こら、またやったのか、この子が可哀想だからこんなことしちゃだめだよ」

「だつてふう君が、ふう君が」

どうやら何かあったらしいがそれは置いておくことにしよう。

「じゃあパパが直してあげるね」

「うん」

途端に白雪は上機嫌になった。

私は、裁縫は得意というわけではないが、そんなに苦手というわけでもないのだからこついつたことは何とかできる。

「じゃあご飯でも食べようか、白雪」

私はキッチンに料理を作りに行った。

「ねえ、パパ」

白雪が下つ足らずの声で私に囁く。

「どうした、白雪」

特に何も無いが白雪の頭をなでてやる。

「パパ、何でも直せる？」

白雪が珍しく、唐突に不思議な事を言い出した。

「そうだな・・・白雪の物なら全部直せるかな」
微笑みながら白雪の髪をくしゃくしゃする。

「パパ、すごい。何でも出来ちゃう」

白雪は魔法使いを見るような眼で私を見た。

「ハハ、そんなすごくくないよ。白雪もいつかそうなるよ」

「ホント？白雪もなんでも出来るの？」

私の手を振り切った白雪の目はとてもキラキラしていた。

「きつと出来るよ」

「うん」

私は白雪を抱きかかえて、何年と二人で寄り添いながら寝ている寝室に向かうのであった。

第4話：葬儀当日（後書き）

なんか不思議な感じで4話が終了しました。

未だに文章的におかしな部分があると思いますが、これから頑張つて改善したいとおもいます。

第5話も頑張るので、出来れば次回も見えていってください。

そして、明日は高校の試験日なので頑張ってきます。

では、また今度。

第5話：姉との会談

今日、私は昨日葬儀の際に久しぶりの再会を遂げた姉と最寄りのファミリーレストランで落ち合う事になっている。

メールアドレスを交換したため、昨日の夜にメールを何通かしてそう決まったのだ。

だが、姉はメールを嫌がっていた。普通女性は電話よりもメールの方を好んでするものだと思うのだが姉は違ったようだ。

そんな理由から次回からは電話での会話となった。

しかしまた、姉も行動が速いものである。久し振りに再会して後日には犯人探しを手伝わせるなど普通はしない行動である。

普通ならばその事についての憎しみや哀しみを延々と語った後、暫くして事件についての概要を相談し、

その信頼できる人を協力させるものだというのが、

そもそも、その誘拐事件の犯人である私をその独断の捜査に協力させることが第一の間違いである。

姉にはしっかりとした洞察力や直感を持ってもらいたいものだ。

だがこうなってしまうてはその捜査とやらに協力しなければならぬ。

下手をすればボロが出るか可能性があることから、姉には早いうちの捜査を諦めてもらいたい。

お互いのためにもだ。いや、得をするのは私だけか。

男はニヤけながら黒っぱいセーターを着込んだ。

「待ったかい？」

私は店に入り、テーブルに頬杖をついている姉に尋ねた。

「あ？、ああ、そんなには待ってないよ」

私が店に来たことが分かると姉は頬杖をついていた左手を足元に下ろした。

「ハハ、ゆきねえはあんまり変わってないね。昔からどこかで待ち合わせする時は必ず先に居て、

絶対に『そんなに待ってない』って言ってたよね」

私は昔の記憶を掘り返した。

「そうだったな、まあそんな昔の事は覚えてないよ」

疲れたような声で姉は記憶を濁した。

「そうか、そういえばまだここ来て何も頼んでない？」

なにも並べられていないテーブルを見渡しそこにいきついた。

「そうだけど・・・何か頼もうかしら？」

「いや、料理はまだよそうかな。けどここに長く居座るだろうからドリンクバーぐらいは頼んでおこうかな」

姉はそれもそうだなと呟き、テーブルの端に設置されている呼び出しベルに手をかけた。

途端に店内にピンポンという音が響き、店の隅に設置されている細長い電光掲示板のに17という数字が点滅した。

まだ昼食前で客が少ないためかすぐさま店員が私達のテーブルに歩みよってきた。

その後店員はテーブルの呼び出しボタンを少し長めに押していた。

「はい、注文をどうぞ」

元気のよく通った声で、160cm弱ぐらいの可愛いめの店員がオーダーをとった。

「えっと、じゃあとりあえずドリンクバーを二人分」

その注文に怪訝な顔を見せるわけでもなく、その店員は機械的に言葉を返した。

「かしこまりました。コップの方はドリンクバーコーナーに置いてありますのでご自由にお取りください」

そう言うとその店員はキビキビと歩いていき厨房に消えて行った。私はしばらくその厨房の出入り口を眺めていた。

「へえ、あんたああいうのが好みなんだ」

すかさず姉の鋭い一閃が突き抜ける。

「えっ、いやそう言う訳じゃないよ。ただしっかりしてるな・・・
みたいなの」

私は慌ててその事についてを弁解する。

「こういう人たちはみんなしっかりしてるでしょ。それとも何、あの子は特別仕事が丁寧だっていうの？」

姉はテーブルに掛けている指先でタンタンと規則正しくリズムをとった。

「あ、いや、どうだろうね・・・じゃ、じゃあとりあえず飲み物取ってきます」

私はその場を逃げるようにドリンクバーコーナーへと向かった。

少し離れた所にあるドリンクバーに行くと、すかさずプラスチック製のコップをとりその中に氷を入れた。

やはりチェーン店だけに飲み物の種類は普通であった。

そう言えば姉に飲み物の種類を聞くのを忘れたが、きっと昔から飲んできたサイダーなのであろう。

そう思つて私はそのボタンを押した。透き通つたサイダーはコップに注ぎこまれ、シュワという音と共に泡を発生させた。

もちろん私はコーラ派であるために迷わずそのボタンを押した。

姉のいるテーブルに戻ると、私はコップをそつとテーブルに置いた。
「ああ、ありがとう」

姉は当たり前のようにサイダーを口に運んだ。

どうやら飲み物の種類はこれでよかつたらしい。

「それじゃあ本題に入るけど、いいかしら？」

姉はコーラをごくごくと飲む私を冷たい目で見た。

「あ、いいよ。で、まずは静奈ちゃんのことだよな」

「そう、静奈の事。誰かがあんな事をしたのかについてね」

姉は遠くを見ているようであった。私の自宅にいる白雪を見るかのように。

「まずその事だけど、静奈ちゃんが連れ去られた現場には何か犯人に繋がる手掛かりみたいなのはなかったのかな？」

姉は頭の中の記憶を呼び起こし一呼吸置いて言った。

「その事なんだけど、警察の方が言うには何も無いそうなのよ。唯一あるとすれば、コンクリートに付着していた卵の黄身だそうよ」
たしかに、私はあの日、卵のパックを落として卵を割った記憶がある。だがあれからはどうやっても私にたどり着くことはできない。

「卵の黄身か・・・それじゃ手掛かりとは言えないかな。何かこれといったものがあるといいんだけどな」

私はまたコーラのコップに手をかけた。

「そうね、けど証拠は全くと言っていいほど見つかってないのよ。駐車場の防犯カメラは作動していたらしいんだけど、

映像を流しっぱなしにしている録画をしていないためか、これといった証拠が残っていないよ」

姉は眉間に皺を寄せて悩ましい顔をした。

「そうなのか・・・ほんとに何か小さなことでも手がかりはないのか」

私は姉を手助けする心の優しい弟を演じ切っていた。

「けど、警察の調べでは男という事は特定できているらしいの」
その言葉に私の^{まぶた}瞼がピクンと反応する。

「へえ、警察もすごいね。けど、それは確たる証拠があつて言うてることなのかな。それとも単に誘拐されたのが女の子だからかな？」
私はとりあえず警察側がどこまで把握しているか、情報を聞き出すとした。

「いや、なんでも車の取っ手に付いていた衣服の繊維から男物の服というのが分かったから、そう断定したらしいの」

私はなるほどといった風にその時の事を思い浮かべた。

「そこまでできるのなら警察側は犯人が分かっているんじゃないか？しかし、ある理由から犯人に手が出せないとか」

私はテーブルに置かれているコーラを体に飲み下した。

「たぶんそれはないと思うわ。けどある理由から手が出せないっていうのには興味があるわね」

思ったよりも姉の思考は冷静であった。心を熱くさせる何かを失ってしまったかのように。

「例えば、犯人が絶大な権力を誇る弁護士の子息であったりとか、はたまた有名な医師の子息であったりとかね」

「確かにそういうのもあり得るかもしれないけど・・・たぶんありえないわね」

「その根拠は？」

私はコップに入ってる氷を普段通りに噛み砕いた。

「根拠か・・・なんていうのかしらね、女の勘ってやつかしら」

私が思うに姉は、女の勘というよりも坂東深雪個人の勘が元々鋭いのだと思った。

「まあたとえ話であって本当とは限らないけどね」

「そうね・・・そういえばあんたの家に警察は来たかしら？」

いつの間にか私の呼び名が『あんた』に変わっていることに違和感を覚えた。

「え〜っと、たしか来たはずだったよ。けど少し話したりしただけで終わったけどね」

そういえば、私が誘拐事件を起こして警察が私の家を訪ねてきた。

警察もまず初めに疑うのは、親族しかいないからであろう。だが先に手は打っておいたので白雪は見つからずに済んだ。

「やっぱり血が繋がっているから調べに行ったのかな。けどうちの家族じゃそんな事をする度胸がある奴はいないわよね」

姉は愉快そうにケラケラ笑った。

「そんな事言うなよ、そんなに弱っちく見えるか？」

私はあくまで演技に徹していた。

「そうかもね、体格は置いておくとして、少なくとも肝っ玉はちっちやく見えるわね」

そう言う姉は今まで手をつけていなかったコップに手をかけた。

「ほんとうきねえは毒舌だよな」

苦笑いしながら本音を洩らした。

「そうだったかしら、あんまり昔の事は覚えてないわよ・・・あの事を除けば」

急に姉の顔が険しいものになり、テーブルの周りの空気が何度か下がったように感じられた。

もちろん私には姉の言っているあの事というものを承知している。

「あの事ねえ・・・出来れば、それについては控えてほしいかな」

そんなに綺麗な思い出という訳でもないので出来ればその事についての話は避けたかった。

「何言ってるの、けど今はさすがに抑えが利くのかしらね」

「あ、いや、そうだろうね。本当にあの時はどうかしてたのかな」

私は冷たい姉の前でただ笑うしかなかった。

天下の誘拐犯も実の姉の前では蛇に睨まれた蛙のようであった。

「まあ、そのことはまた今度話そうかしらね」

そう言う姉の表情が元の姉に戻っていた。

「あっ、そうだ、そろそろ料理でも注文しない？ちよっとお腹減ってきたちゃったんだよね」

私は既に呼び出しベルに手を掛けていた。

「そうね、時間的にもそろそろ何か頼もうかしらね」

姉も承諾したことなので私は呼び出しベルのボタンを押した。すると、思ったよりも早く店員が駆け寄ってきた。

それは先ほど自分達の所に来た可愛い店員さんではなく、バイトで急遽入ってきたような男子高校生であった。

「はい、えっと・・・ご注文をどうぞ」

まだ経験が少ないのか発した言葉には不安が含まれていた。

「じゃあ、このミラノサラミとハムのピザと・・・姉さんは何にする？」

姉はページをめくり、ある料理を指さした。

「私は採りたてきのこのスパゲッティ」

そう言つと店員は品名を繰り返した。

「それでは繰り返し返させていただきます。ミラノサラミのハムのピザが一つと採りたてキノコのスパゲッティでよろしいですね？」

「はい」

高校生の店員は今回はかまわずに話すことができた。

やはり他の店員同様、この店員も厨房へと消えて行った。

「あっ」

私はその事に気をとられていてある事を忘れていた。

「どうしたの？急に」

「そういえばピザにWチーズを付けるのを忘れてたわ」

その後は、他愛のない談笑で終わり、この相談は別の日に持ち越されることになった。

はあ、姉の事は置いておくとして白雪の今後はどうしたものか・・・最近は何心が付き始めてきたから、もう始めてもいいものかな。私は白雪の成長を一番の楽しみにしている、それはもう親以上の愛情になっている。

白雪は物事の良し悪しは分かっているから何かを教えるのはとて

も簡単だ。

だから白雪、お前は私の愛玩人間カナリアになってもらうよ。

第5話・姉との会談（後書き）

・・・、どう見てもサイリアです。

ということで今回は二人の会話のみです。

もう少し延ばす予定だったのにも関わらず短くなりました。

あまり量がありませんがここまで読んでくれてありがとうございます。

次回も頑張るんでまた今度。

第6話：ある日の朝食

1 .

私は秋田県のとある民家で生誕した。

正確には父親と叔父と叔母と助産師に見守られて母親に出産された。自宅出産に関しては母親たつての希望であったのでそう決まったらしい。

だが、その時はなかなか出産に立ち会ってくれる助産師が見つからなく、

病院での出産を決めようとした矢先について現れたのでなんとか自宅での出産になったらしい。

しかし問題はここからだ・・・
どうやら私の父親は、私を生むことを反対したらしい。

今の私から言わせてみればお前が妊娠させたのがいけないのだろう
と言ってやりたい。

今の時代避妊の道具など普通のお店でも売ってるくらいなのだから
そのぐらいは責任を取ってもらいたいものである。

そんな事はさておき、私の母親はそんな父親と反論を繰り返していた。
た。

父親は私の母親に対して中絶、つまり人工妊娠中絶を勧めたが母親
はそれを断固拒否したらしい。

一時期は離婚の話題も出たらしいが結局その事については父親はな
んとか思いとどまったそうだ。

しかし人工妊娠中絶をしても構わない22週の期間に近づいてくる
や否や父親は半ば強制的に病院に連れて行った。

母親はそのとき必死に抵抗したが子を授かっている一人の女の力で
は男の力には勝てなかったようだ。

だが、母親は男の隙を見つけてなんとか病院内から外へと抜けだし

た。
しかしそこで母親は妊婦としてはやっていけないことをしてしまっ
た。
なんと階段から転落したのだ。
大抵こんな事をしてしまえば赤子はおるか母子共々怪我を負う。も
しくは赤子、つまりは私が死ぬ。
だが奇跡的にも打ちどころ良かったためか私はこうして元気に生き
ている。父親の憎悪を孕みながらだが。
そのため私は幼少時代の頃から幾度ととなく父親の暴力を受けてい
た。
今となつては思い出となつて残っているのだがその種類は数知れな
い。
今ではそれをまとめて虐待というのだと分かった。いや本当はもっ
と前から知っていたのだが。
暴力に関しては至つてシンプルなものが多かった。
主に殴る、蹴る、叩く等の暴行が多く中でも一番きつかったのは煙
草の吸殻を腕や背中に押し付けられることだった。
父親は思ったよりかは抜け目がなくそういった事をあまり目立たな
い程度で済ませていた。
しかしその微々たる虐待も幼少時代の私からすればとてつもない恐
怖の毎日である。
傷があからさまに残っていれば他の誰かが気づき何か手を差し伸べ
てくれると思っていた。
しかし夢は夢でしかなくそんなことは私に訪れなかった。
光は私を照らしてくれなかったのである。
よって私は光が照らさないまま暗い所で生きていたのだ。

私の可愛い白雪。お前はもつともつと綺麗になってくれ。
男が私の正面に立ち、言った。

白雪ちゃん。僕達とずっとずっと遊んでようね。
周りにいる人形たちが私に囁いた。

「・・・私の大事な」 「あなたはどこに
いるの。今いったい何をしてるの？」

いつまでも待つているから帰ってきて。お願い。

私の知らない誰かが私に訴えかけてきた。

顔はもやもやしていてよくわからない。だがそんなに嫌な感じはし
なかった。

私も知りたい。あなたが誰なのか。

白雪は横で寝ている私をどうこうするわけでもなく、掛け布団を掴
んでガバッと起床した。

半分覚醒しつつあった私は、その音で完全に覚醒し目をゆっくりと
開いた。

私の横では白雪がびっくりした顔で目覚めていた。

私は布団から腕を出し、目をこすった。

「どうした白雪？」

「怖い・・・夢・・・怖い」

どうやら白雪は悪夢を見たそうだ。だがそれは今日に始まったこと
ではない。

こういったことは以前からあり、そのたびにこんな会話が行われる。
しかしそれは毎日起こるといってもいい。大概は1カ月に1度
くらいの周期で起こり、酷いときは週に1回ぐらいだ。

「また夢か・・・白雪、平気だよパパがいるからね」

「パパ・・・怖いよう・・・」

私は白雪を抱いて頭を撫でてやった。白雪自身も短い手をいっぱいに広げて私の腰をぎゅっと抱きしめてくれた。

「もう大丈夫だからね」

優しく白雪の髪を撫でてやる。

「うん・・・」

白雪は力いっぱい私を抱きしめてきた。

やはりどんな生き物というのにも恐怖というものは付き物らしい。ほとんど知識がなかるうが恐怖というものは、生物の本能によってくるものらしい。

例えば猿なんかにしても、自分の身に危険を感じれば高い声で鳴きものすごい速度でその場から逃げようとする。

そしてもうひとつ例を挙げてみると、世界に4億匹いるといわれている犬もそうだったことがある。

つまり知識と感情は完全にイコールでは結ばれないという事だ。

だが、私が思うに感情と本能は完全にイコールであると思われる。こんな白雪でも感情だけはちゃんと一人前に身に付いているのだから。

「じゃあ白雪、朝食でも食べようか」

白雪を抱いていた手を放して布団を足元に払いのける。

白雪はまだ恐怖心が残っているのかなか私から離れなかった。

私はその状態でしばらく白雪の傍にいてやった。

「よし、じゃあそろそろ食べようか」

私がベッドから足を投げ出すと白雪は頷いてベッドから降りた。

そしてベッドから降りた私は扉を開け、まだ寝起きのため動きが鈍いのか重い足取りでキッチンへと向かった。

白雪は椅子に腰を掛けており私はいつも通りに籠から食パンを取り出していた。

「白雪、今日はどの味がいい？」

「いちじく」

即答であった。そう言えば最近朝食でのジャムはイチゴ味しか食べていなかったような気がする。

私は二つ溝のあるトースターに食パンを入れ、食パンを焼いている間にマーガリンを冷蔵庫から取り出した。

「そういえば白雪、何で最近はイチゴジャムばかり食べるんだ？
これは先程の疑問だった。」

「うん、白雪、イチゴジャム好き」

最もな意見であった。たしかに何度も食べるといふ事はそのジャムが好きという事だ。

「そうなのか、それと白雪。今日は新しい友達を連れてきてやるからな」

新しい友達というのはそのままの意味ではなく、もちろん白雪の部屋に数多く存在するぬいぐるみのことだ。

「本当？新しい友達」

「ああ本当だとも、楽しみにしててね」

「うん」

そしてちょうどよくトースターがチンという音を上げて、先程入れてあった食パンがトースターの溝から半分ほど顔を覗かせていた。

私はこんがりとキツネ色に焼けた食パンにマーガリンを塗りつけた。食パンの表面ががテカテカをつやを見せ始めた辺りで私はジャムの蓋を手をかけた。

ジャムの蓋は最初に開けた時よりかは簡単にパカッと開いた。

ジャムの中にスプーンを突っ込み食パンにそれを塗りたくった。

私の方にもジャムを塗ったが白雪の食パンと比べると薄く塗ったつもりだ。実をいうとあまりジャムは好きでないのだ。

「よし・・・白雪、できたぞ」

そう言つて、テーブルの上にイチゴジャムで赤く彩られた食パンの乗ったお皿が置かれた。

「いちご、いちご」

白雪はお皿を手をとり食パンを両手の指先で持った。

だいぶ前に手の全体で持ったら熱く、手を火傷しかけたことがあって以来同じ轍は踏まなくなった。

「いただきます」

白雪の手にした食パンがカリッとという音をたてて小さい口の中に入って行った。

「美味しい」

私も白雪を食べるのを見送った後トーストを口に運んだ。

口の中では甘いイチゴがバターの為り替わりであるマーガリンに包まれて胃に落ちて行った。

私は玄関に立ち、外への扉に手を掛けていた。

「じゃあ白雪、出かけてくるよ」

「お友達連れてきてね」

後ろで白雪が言った。

「うん」

そう言っただけで私は外に出た。

玄関先に止まっている白のシボレーの鍵を開け車に乗り込んだ。

教習所ではマニュアルだったが、今の時代となってはやはりオートマチックが一番楽だということなので

もちろんこの車はオートマチックだ。

さて、そんな事はさておき今日は姉の希望で姉の家にお邪魔することになった。

そのため私は姉の住んでいるアパートに向かっている。

少し前までは一軒家に住んでいたのだが、夫と子供が居なくなった家で住むというのは辛いということだ、

家を売っぱらいとあるアパートで一人暮らしを始めた。

今となってはその原因は私というのが明らかだ。

私が、赤子であったときの白雪、つまり姉の子供の静奈ちゃんを誘拐したことによってすべてが崩れたのだ。

子供誘拐されたことにより夫婦は仲違なかつがいを始めて、とうとう離婚。
そして今この現状があるということになる。

姉に私が犯人だといったら間違まちがいなく私に対してこう言うだろう。

『人の皮を被った悪魔』と。

しかしこれは妄想でしかなく本当はそうとは限らない。もしかしたら何も喋れなくなるのかもしれない。

何が起るかわからない。だから楽しいんだよ人生は。

第6話・ある日の朝食（後書き）

すいません・・・今までで一番短いです。

どうも風邪気味っぽいので動けません。

という事で次の試験が近い中、受験勉強との両立を頑張り更新していきます。

見捨てられなければ幸いです

第7話：曇りの雨時

1

私は毎日のように父親から虐待を受けていた。だが唯一の私の救いは母だった。

母はそんな私を見かねて父親を説得させたり、私を庇ったりと本当に光であった。

だが逆にいえば父親はそれをも包み込む闇であったという話だ。

いつしか私は父親からの虐待に何も感じなくなっていた。

しかし、父親が母に暴力をふるった時は、私の中ではそのことへの憎しみが渦巻いていた。

いつかこの父親を殺してやろう。私はそう思った。

私の見方に立つてくれる母のために。

2

外の景色を見ながら姉のアパートに向かっていた私は今、そのアパートの前にいた。

アパートの外装は汚いという訳ではなかったが、逆に綺麗という訳でもなかった。

そして急に姉の部屋に押しかけるのは悪い気がするのと、車をどこに止めればいいのかを聞くために姉に一通電話を入れる。

電話をかけると手に携帯を持っていたのか、すぐに姉が出た。

「もしもし」

『もしもし、もう着いたの？』

「うん、今アパートの前にいるんだけどどこに止めればいいのか分からないんだよね」

『ああ、車のことか。車は別にアパートの前に止めておいていいぞ。』

「そんな事していいのか？ほかにも住んでる人いるだろ、迷惑になるんじゃないか？」

「いいんだよ別に、それと私ここの大家さんと仲いいし」
なるほどといったように私は誰もいないその場で頷いた。

「そうなんだ。じゃあ前に止めておくわ。それと今から中に入るけど、入っていいかな？」

「いいぞ。準備も何も私の家はいつでも人が入ってきていいようになってるから」

言ってる意味がよく分からなかった。とりあえず私はシボレーをアパートの前に移動させ、

サイドブレーキを入れてエンジンを止めた。そして姉の住んでいるアパートに入って行った。

姉の部屋は204号室で2階の端の方にあるらしい。

私は小綺麗な階段を上がって2階に行き204号室の前まで来た。

204号室の前の傘立てにはどこにでも売っているようなビニール傘と、黒のナイロン製の傘が立て掛けてあった。

最近使用した形跡はなく、ただそこに置かれていた。

そして私は204号室の扉を開け、中に入った。

「お邪魔します」

靴を綺麗に揃えて脱いだ私は、その奥にある扉に手を掛けた。

木製の扉はギイという音を立てながら開き、その中には水色のパジャマ姿の姉が座っていた。

「久しぶり。って言ってもまだそんな経ってないか」

姉は軽く手を挙げてこっちを見た。その部屋は畳の部屋で、

真ん中に座っている姉を見ると、白雪が畳の部屋で座りながらぬいぐるみと遊んでいるのを思い出した。

「そうだね・・・7日ぐらいかな？」

「そんなもんだったかな」

姉は私を座るように促して台所でお茶を入れ始めた。

「で、ゆきねえ。何で今日はここに呼んだのかな？」

姉は急須に入れたお湯をお茶の粉入った湯呑に注いでいた。

「なんだろうね、なんとなくかしら」

そして姉は湯呑をちやぶ台に似たテーブルに置いた。

「・・・何か情報つかめた？」

遠慮なく私は差し出されたお茶に手を付けた。この寒い時期に暖かいものは必需品である。

「いや、特にこれといったものはなかったよ。やっぱり今からの捜査は難しいのかな」

これといって何も調べていない私がそういった。

「やっぱりね、今からはなかなか調べられないものね・・・」

「そうかもね」

ズズズという音を立てながら飲んだお茶は湯呑の半分まで下がっていた。

「ねえ、なんで誘拐とかをするのかしら？」

一瞬自分対して言われたのかと思いきや、数秒遅れてそれが誰だか分らない複数の人に向けての言葉と分かって落ち着いた。

「いきなりなんだよ。けど、あんまりそういうこと思った事がないからよく分からないな」

「そう、私がかかってる事は、そう言う犯罪者は狂ってるというか表現できないわ」

その言葉には犯罪者である私でも少しカチンときた。

「それはちよつと違うんじゃないかな。だって犯罪者っていつでもピンからキリまでいるのは当たり前で、

しかも世の中には自分はやってないのにも関わらず本当の犯人に犯罪者に仕立てられて刑務所でその人に代わりに罪を償っている人もいるからね」

姉の表情が少し険しくなる。

「けど、犯罪者は犯罪者でしょ。悪い事を行ったことに変わりはないわ」

「たしかにね、犯罪を犯したから犯罪者の訳で悪い事をやったのは事実だ」

「でしょ。けどなんで世の中には悪い事をしたのにも関わらず誰にも咎められずに悠々と暮らしている犯罪者がたくさんいるのよ」
姉の表情が一層険しくなる。だが私の表情は至って冷静だ。

「そうなんだよね、警察に捕まらない犯罪者も中にはいるんだよね。しかも法律には時効っていうのがあって15年を過ぎるとその罪はなくなるんだよね」

警察に捕まらない犯人とはまさに私の事だ。

「なんで？なんで15年が経てば罪がなかったことにされるのかしら・・・やったことはずっと残り続けるって言つのに」

「法は絶対だからその事は曲げられないんだよね」

私はテーブルに置かれた湯呑を持ち、完全に混ぜ切れていない粉の事を気にして湯呑を軽く回した。

「私の友人が昔こんな事を言ってたわ、『どんなに長い年月が経とうと、被害者の傷は絶対に消えない。しかし世間からは忘れ去られる』と」

「・・・もしかしてその友人もなにか事件に」

私は素直な気持ちで姉に訊いた。

「ええ、両親が殺されたって言ってたわ」

「そうなんだ・・・」

「何でも大学生の頃、休日にいつも通りにアルバイトをしていて夜遅くに帰宅したところ、

家の中の一室が血で染まっていてその部屋の中央で両親が死んでいたそうなの。

そして母親の方は心臓が一突きで即死らしかったんだけど、父親は体中が切り傷で埋め尽くされていて最後に包丁が心臓に突き刺さって死んだらしい」

「あつ、それだいたい前にテレビを見た。そういえば犯人は捕まって今も刑務所にいるんだっけ」

一瞬姉の顔が歪んだが、また話を続けた。

「残虐性が高いというのにもかかわらず死刑にならず、将ちゃんが言ったように今も刑務所の中。」

ついでに言っておくとその友達は今でもその犯人を憎んでいるらしいわ」

「そりやそうだよな。まだ社会人にもなっていないのに両親をいつべんに奪われて何も思わないはずがないよな。」

ましてや、まだ犯人が生きてるなんて」

私は両手を軽く挙げてオーバーリアクションをとった。

「で、今は私と同じように一人暮らしをしてる」

「へえ・・・そうなんだ、やっぱりまだその時の傷が残ってて人と話すのが怖くなってるのかな。ようするに对人恐怖症？」

「あんた最近ズバズバ言うようになったのね。本人に行ったら間違いないくブチ切れるわよ・・・」

けどたしかにその事件のせいで彼女は人と話すのが怖くなってるわね」

たしかに今のは失言があった気がする。しかしそれは昔からだ。

「そうなっちゃうもんなのかな、意外と脆いんだよね人って」

「そうかもしれないわね、私だって一時期どんなけ壊れたことがあった事やら」

姉が少し苦笑いをする。

「・・・けど今はなんとか戻ってこれたよね。まあ人は壊れやすくもあるし治りやすくもあるのかな」

「どうなんでしょうね」

姉の苦笑いが笑いに変わった。

「それと話が変わるけどさ、今度静奈ちゃんが誘拐されたあのショツピングモールまで言ってみない」

「それは遠慮しておくわ、あそこは行きたくないんだよね。なんかあそこに行くとすぐに気持ち悪くなるんだよね」

私は粉が沈殿しかけた湯呑をまた回した。

「やっぱりゆきねえもちよつとトラウマがあるんだ」

「うーん、トラウマっていうか体が拒否するんだよね」

姉は初めて自分のお茶を啜った。

「体がねえ・・・まあそういうもんなんじゃないのかな？むしろ普通に行けた方がおかしいのかもね」

窓から見える雲行きが怪しくなってきたのが分かる。

「そうなのかな、分かんないや」

「ゆきねえ、最近なんかあった？」

私は唐突にどうでもいいような事を聞いた。

「いきなり何よ。そうね、最近は何かあったかしらね。・・・えつと、そういえばこの前いつも通りにお店で働いてたら

見知らぬ男の人が私の事ジロジロ見てきてなんか気持ち悪かったかな」

本当にどうでもいいような話だった。

「へえ、そういえばゆきねえは今はお店で働いてるんだ？それとジロジロ見てたのはゆきねえが変な格好してたか、奇麗だったからじゃない」

「あつ、嬉しいこと言ってくれるな将ちゃんは。けどお世辞はやめときな」

姉は軽く笑って流した。

「そんなことないよ、ゆきねえは奇麗だよ。前からね」

外の天気は今にも姉が降りそうに状態になっていた。

「全く何言ってるんだか・・・だからあのときはあんな事したのかな・・・？」

姉の微笑を含んだ笑みが私には少し怖かった。

「・・・だからあの時は話はあるまりしてほしくないんだけどな・・・けどあえて答えるんなら、そうなのかもね」

まだ私が高校生の頃の姉は私からすればとても魅力であった。

「そうなんだ。じゃあ聞くけど、今はどうなの？」

「えつ、・・・そうだな・・・」

私は目を下に泳がせていた。

「まだそういう感情があるのかな」

姉がさらに私に追い打ちをかけてきた。

「どうなのかはよく分からないけど。意外とそうなのかもしれないかな」

私はここで答えるのはいけないと判断したのか少し言葉を濁した。

「じゃあ、今からあの時の再現でもしてみる？」

いつの間にか外では目ではつきりと見える程度の雨が降っていた。

「だからあの時はどうかしてたんだったって」

姉は私の言動を振り切ってパジャマのボタンに手をかけていた。

「別にいいじゃないの、そんなに減るもんじゃないでしょ」

「その言い方だと少しは減ってると思うよ」

姉は、上から一つめのボタンを外し終えて2つ目のボタンに手をかけていた。

「だからやめてって・・・はあ、そんなこと聞かないか・・・」

「そうよ、本能に従っちゃいなさいよ、そうしたら楽になるわよ」

姉の服はほとんどはだけで、今では白いブラジャーとそれに隠れる豊満な胸が見えていた。

「どうするの、するの？しないの？」

一見2択に見える質問であったが、姉がひとつの選択肢を隠しているようにも見えた。

「しかたないな・・・どうせゆきねえはするって言わないと家から返さないんですよ」

さすがの私もそれに従う事にした。

「正解、しないって言ったからここから出さない予定だったから」

姉は満面の笑みを浮かべていた。

「つまりここに呼んだ本当の理由って・・・」

「違うわよ、これはただの気まぐれよ。本当になんとなくなのよ」

姉はボタンをすべて外した服を脱ぎ棄てて、ズボンに手を掛けていた。

「ほら、あんたも脱ぎなさいよ。私だけ脱いでたら馬鹿みたいじゃないの」

「けど寒いじゃん」

「すぐに暖かくなるわよ」

そう言っていると姉は部屋の隅に寄せられていた布団を引っ張り出してテーブルを退かした。

「ほら、早く脱ぎなさいよ」

姉の身に着けている衣服は上下同じ種類のショーツとブラジャーだけであった。

「じゃあ寒いから布団に入ってるね。準備がすんだらきてね」

そう言っていると姉は布団に潜り込んだ。

どうしたものか・・・これはもう逃げられないらしい。つまり、今から起きることは近親相姦か？

いや二人の同意があるからそうとは言わないのか。だが私が白雪と・・・まあその話はもっと先かな。

私はセーターを脱ぎ、ベルトを外した後にジーンズのホックを外しジッパを下ろしてジーンズそのものを脱いだ。

そして姉が潜り込んだ掛け布団を剥ぎとり、姉のいる布団に入ってしまった。

「ねえ将ちゃん・・・昔のこと覚えてる？」

至福の笑みを浮かべた姉が私に問いかけた。

「昔っていつぐらいのこと？」

姉がいつぐらいの事を指しているのか私には分かっていた。

「私が大学生ぐらいの時で将ちゃんが高校生の時かな」

「・・・うん、覚えてるよ」

私は姉を抱きしめた。先ほどと同じように。

「あの時は楽しかったよね」

そんな私を姉は抱き返してきた。

「そうだね、なんにも考えないでくれたからね」

「じゃあその時の話でもしようか」

姉は僕の方に向き直った。顔が近いためか姉の温かい吐息が私の顔にかかる。

「別に構わないよ」

「じゃあしよう」

そして私達は軽くキスを交わした後、長い長い昔話が始めた。

第7話：曇りの雨時（後書き）

今回は誤字や脱字がある可能性があるので、あったらすみません。

なんだかんだいって7話になりました。

ここまで見てくださっている皆様方本当にありがとうございます。

2月10日：すみません。誤植があったので修正しました。

第8話：とある過去の過ち

1

僕は素直に姉が好きだった。壊してしまいたいほどに。

だがそれは許されない、なぜかと聞かれれば僕達は兄妹だからである。

だが時にそれすらも無視して姉に手を掛けようとする僕がいる。

だが人には理性があるように歯止めが利く。だが僕はそれすらも壊そうとしていた。

ゆきねえはどうしたら僕を見てくれるの？

2

「・・・しょ・・・ちゃん・・・起き・・・」

夢の中にいる僕に向って誰かが話しかけてきた気がした。

「将ちゃん、起きて」

夢から現実に取り戻されるにつれて頬に痛みを感じる。

「ほら、早く起きなさいって！」

姉がついに僕の掛け布団をはぎ取った。

そして僕は目を覚ました。それに伴い右の頬がジンジンしていた。

きつと姉が私を起こす際に頬を叩いたのだろう。

「あんたいつまで寝てんの？今日はどっかいくんでしょ・・・ま
ったく」

僕は姉のその言葉の意味を、寝ぼけて処理スピードが遅くなった脳を出来る限り素早く動かし理解に勤いそしんだ。

「えっと・・・なんだっけ？」

結局私はその答えを見つけ出す事が出来なかった。きつとその部分だけが欠落してしまったのだろう。

「はあ？あんなそんなことまで忘れちゃったの。あんなに楽しみにしてたのにさ・・・もしかしてアルツハイマー病？」

酷い言われようだった。それと、『あんな楽しみに』という言葉で頭の中の何かが引つかかった。

「アルツハイマーって・・・僕に言わないでくれよ。アルツハイマー病患者の人に失礼だろ。」

けど知ってた？そういうのを差別って言うのだよ、ゆきねえ」

処理の遅くなっている頭でも悪口を叩くような機能は果たしているようだった。

「ああそうですか。じゃあそんなこと言うなら今日は行かなくていいよね」

姉が僕に向ってにつこりと微笑んだ。

私は頭でその事が分かっていたいなくても体が何かを記憶しているのか咄嗟に言葉が出た。

「ごめんごめん、行くよ・・・じゃなくて行かせてください」

僕は目ヤニを落とすために目を擦った。行動と返事が矛盾していた。

「分かった、しょうがないなあ将ちゃんは。けどどこに行くかは分かっているよね？」

痛いところを突かれた。あくまで反応したのは体であって、その返事を返す頭は無いようだ。

「ええと・・・ゴメン分からない」

僕はすぐに考えることを諦めた。それが無駄だと分かったからだ。

すると姉はニコツと微笑んだ。それが純粋な笑みではないのは僕には分かっていた。

「分からないんだ、正直だね将ちゃんは・・・けど自分で言ったことぐらいは覚えておこうね」

姉がいつの間にか拳を握っていた。そしてそれが何をするために握られているのかももちろん僕には分かっていた。

「ごめんなさい」

姉は最小限の力で強いダメージを与えたいらしく、地味に痛い弁慶

の泣き所、つまりは脛すねを殴りつけた。

瞬間痛みが体を突き抜ける。そして痛みがきつかけで忘れていたことが頭こゝろを過よった。

「あつ、思いました。そういえば楽器屋に行くんだったよね」

「そう・・・別に私は行きたいわけじゃないんだけど、将ちゃんがどうしても一緒に行きたいって言うからそれについていこうとしてるんじゃない」

最初の方は合つてるとして、『どうしても一緒に行きたい』ということには記憶がついていけなかった。

ただ私が忘れていただけなのか姉が勝手に作ったのかそれは分からない。

「どうしてもね・・・そんな事言ったかは分かんないけど、今日に行くからね。忘れててごめんね」

膝を押さえながら僕は笑った。姉はまったくといった表情をした。

「まあいいか。じゃあすぐ用意してね」

「分かった。けど、朝飯まだなんだけど・・・」

僕はそう言いながら時計を見た。そして自分の言葉に後悔した。

「何言つてんの？もう1時だよ。あんたが起きるの遅いんですよ」
たしかに外を見るとかなり日が上がっていて、いい陽気だった。

「じゃあ昼食は外で食べればいいのかな？」

「もうあんたコンビニとかで買ってくれば？私もう昼食も済ませてあるから」

今さら気づいたが、姉の恰好はいつものパジャマでなく外着用の服にチェンジされていた。

「えっと・・・ということは僕は今から顔洗うだの歯を磨くだのして服を着替えればいいんですね」

妙な敬語に切り替わった。

「そういうこと、じゃあ下で待つてるから早くしてね」

姉はドアノブをガチャリと回して部屋から出て行った。

「ゆっくりしてたらまたゆきねえに怒られるな・・・」

そう呟くと僕はすぐに行動にかかった。

僕はまず洗面台に洗顔と歯磨きをするべく向かった。

水を流すと冷たい水が出てきた。いくら春だかと言ってもさすがに冷水はきつい。しかし、我が家の水はお湯になるまでに時間がかかる。

その水がお湯になる前にまず僕は歯磨きをした。これは単にお湯で口を濯ぐのが嫌だったからだ

そして歯を磨き終わった僕はぬるくなったお湯で顔を洗った。

僕はそのお湯で完全に眠気が吹っ飛んだ感じがした。

そして見るからに安そうな石鹸を使って顔を洗った。眠けから覚めるというのはこういうことなのだ。

そして僕が次に行くべく行動は着替えだった。

別にファッションにはあまり興味がないので、いつも通りに下がジーンズ上がTシャツにパーカーを羽織った格好だ。

全ての行動が終わった僕は後ろポケットに携帯と財布という軽装備で、姉のいるだろうリビングに向かった。

僕の予想に反して姉は玄関に立っていた。

「遅い、もっとテキパキ行動しなさい。というかもっと早く起きなさい」

ごもつともな意見だった。

「ごめん、それともう準備できてるからそろそろ行く?」

「そろそろって、全部あんた待ちだったんでしょうが」

完全に僕の失言だった。今日の僕の12星座の運勢はきつと最下位に違いない。

「確かに・・・とりあえず行こうか」

「しょうがないな、じゃあ行こ」

そう言っただけで姉が外に出ようとするリビングの扉が開いて父が出てきた。

「深雪、気をつけて行ってっらしやい。それと将太もな」

完全に僕がおまけみたいな言い方だった。

「分かった、じゃあ行ってくるね」

「行ってきます」

一応報復のためにそっけなく言ってみたつもりだ。しかし実際の所普段と変わった感じがしなかった。

僕は姉と下り電車で3つ目の所にある楽器屋に向かった。

「二人とも仲が良いな、今時の兄妹でこんな仲がいいのは滅多にいないかもしれない」

父が母に言った。この家には今二人しかいない。

「そうですね。しっかりと育ててくれて、生んだ甲斐がありましたよ」

「そうだな。本当によく育ててくれた。これからも仲良くしてもらいたいもんだ」

父は母に笑いかけた。母はまったくだという表情をした。

「仲良く・・・な・・・」

「よし、着いた」

僕は起きた時のテンションと比較すると数段高かった。起きたと言っても昼なのだが。

「まったく調子いいんだから。けど、なんで兄弟そろって行く場所が楽器屋なの。そもそも兄弟って一緒にどこかにいくものなの」

言われてみれば兄妹でどこかに行ったという事はあまり聞かない。

しかしそんな事を気にしてはいなかった。

「そりゃ楽器類が見たかったからに決まってるじゃん。とりあえず入ろうよ」

僕はお店に入って行った。

お店の中にはそこそこ人が入っていたが、休日という事を考慮すると当たり前に入り具合だった。むしろ少ない気がする。

「そんなに混んでないみたいね。じゃあ私はそこらへんに座ってるから」

姉は音楽にはあまり興味ないようでボーっとしていた。

僕はそんな事を気にせずギターの機材のコーナーに向かった。少し前まではメタル系にハマっていて低音重視の曲を練習していた。そのためデイストーションを使っていたわけなんだが、最近はずつたりしたのもいいかなという事でバラード調な曲にも挑戦している。そういつた理由からクリーンの音を出さなければいけないわけだけど。

何せ今まで歪み系のエフェクターしか使っていなかったで、コーラス等のエフェクターを持っていなかった。

普通は何をやるにしてもそのぐらいは持っているものなのだか、自給の低い高校生のバイトではなかなか懐が狭い。

つまりお金がないためずつと買えないでいたのだ。しかし最近やつとお金が貯まったので買いに来たのだ。

エフェクター自体は以前ここにギターを持ってきて試奏をしたので事前準備は万全だった。

僕がエフェクターを見ていると店員さんが近づいてきた。

「試しに音を聞いてみますか？」

男性の店員さんはニツコリと微笑みながら聞いてきた。営業スマイルというやつだ。

しかし先ほど言ったように以前試奏を済ませているのでそんな必要はなかった。

「あ、結構です」

そう言うと店員は「何かお試しになるなら近くの店員に声を掛けてください」と言って去って行った。

とりあえず僕はそこを後にしてギター本体のコーナーに向かった。一度ベースもやってみようかと思っただが、高校生の経済力ではギターとベースの両方をやることは無理だった。

そして今僕はギター歴3年ということ、それなりに弾けるレベルに達していた。

しかし未だにスウィープは出来ないでいた。だが別にそれを使う曲

はやっていないのでそんなには問題にならなかった。

一番使いどころない技はエイトフィンガーだと思うが、本当にあれは必要なのかと思った。

僕は壁から吊るされているギターを眺めていた。

目を引いたギターはParkerのギターだった。あのギターを見ていると折れるのではないかといつも思っている。

あのギターはとても軽いのだが、ネックが細い上にボディまで薄い。あれを作った人をすごいと思う。

というより値段も凄かった。本当に高校生じゃどうにもならない値段だった。

そして次に僕に近づいてきたのはお店の店員ではなく姉だった。

「将ちゃん。もう飽きてきたんだけど」

「早いんだね」

目をキラキラ輝かせる僕と違って姉の目はどんよりしていた。

「もうここ出たいんだけど。早くしてくれない？」

姉が急かしてきた。特にこれと言って長居する理由はないので僕はエフェクターのコーナーに向かった。

そして近くの店員を呼んで「これ買っんでよろしくお願いします」と言った。

僕がそう言つと店員は「はい」と笑顔で言った。今度は女性の店員さんだった。まだ若いようで、かなり可愛い風貌だった。

店員は店の奥に消えて、しばらくしてエフェクターの入った箱を手にして帰ってきた。

「こちらの商品でよろしいでしょうか？」

僕が「はい」と頷くと、すぐに会計が行われた。

僕は姉が後ろにいる中、財布から5千円札一枚と千円札3枚、そして小銭を出して会計を済ませた。

「あんた結構お金持ってるだ」

姉がにやりと笑った。その瞬間、姉は絶対僕にたかるだろうと判断した。

「どうせお金持ってるんなら何か奢もてってよ」

予想的中、どうせその後は服の飯かのどちらかがくるんだろう。

「無理無理、そんなにお金持ってるわけじゃないんだ」

「いいじゃん、服とか買かってよ」

またしても当たった、どうも今の状況は援交してたかられてるおやじの気分だ。

「だから無理だって。飯ぐらいいいけどさ」

「ホント？じゃあマックでも行こう」

横暴すぎる、姉には遠慮というものを知ってもらいたい。

「マックって、ゆきねえは昼食食べたんじゃないっけ？」

「いいんだよ、おやつみたいな感覚で食べるから」

「・・・太るぞ・・・」

僕は姉に聞こえないように小さく呟いた。しかし姉にはその声が届いていたようだ。

「悪かったわね太ってて、それでもカロリー計算はしてるんだからね」

「はいはい分かってます、じゃあとりあえずマックでも行こうか。

昼食食べてないし」

今思うとマックに行こうと提案した理由は、

僕が昼食を食べてない事に対しての配慮だったのか単に自分が食べたかったかは分からなかった。

「よし行こう」

姉は足早に楽器屋を退散し、田舎では信じられないような雑踏の中、近くのマックに向かった。

僕は壁際の二人用テーブルの椅子に腰を掛けていた。

時間的にはもう昼食を過ぎているというのに会計の前ではまだ短い列ができていた。

そして姉は、自分の注文と僕の注文を頼むためにその列に並んでいた。

僕はあまりお腹が減ってないのとお金の支出を抑えるためにノーマルのハンバーガーを2つ頼んだ。

姉は、確かビックマックを頼むだとか言っていた気がする。それはおやつという量でないのは確かだ。

そして姉が僕の財布をそのまま持っていたのが謎だった。最悪の場合はお札が抜かれている場合がある。

そんな事を考えていると姉がトレイにハンバーガーやビックマックを乗せてやってきた。

「買ってきたよ。労働量で500円頂戴」

ちやつかりしたやつだ、だがその程度の労働でお金をあげる気はなかった。

「嫌だ、それに値するようない事してくれればあげるけどね」

「めんどくさいから嫌だわ、まあとりあえず食べよう」

姉はビックマックの箱に手を掛けて、ビックマックが崩れないように食べていった。

僕は片手でひよいとハンバーガーを持って口に運んだ。味はもちろんハンバーガーだった。

「そういえば今日は何買ったの？」

姉が突然聞いてきた。

「えっ、今日はギターのエフェクター買ったんだけど」

「ふ〜ん」

あまり突っ込まないところを見ると、それが何なのかよく分からないようだ。

「よく分かってないみたいだね」

「うん」

やはりそうらしい。というか即答であった。

「じゃあなんで付いてきたんだよ」

「暇だからだよ」

姉はビックマックを食べる手を一向にとめない。もう既にビックマックの半分が姉のお腹に収まっていた。

「暇つて、どこかに一緒に行く友達とかいないのかよ。一応現役大学生でしょ？」

「現役大学生と友達とどこかに行つて遊んでるっていうのは^{イコール}で結ばれないんだよ。知つてた？」

それは初めて聞いた。大学生は自由なハッピーライフだと思つていたのに。

「それつて友達がいなくて意味なの？」

言つたあとに気づいたが、人として最低な質問だった。

「失敬な、友達はあるに決まつてるでしょ。どこかの引きこもりじゃないんだから」

「じゃあ僕も言つておくけど、引きこもりと友達がいらないは[＝]で結ばれないんだよ」

下手に出ている僕が不思議な反撃を実行した。

「なんかよく分からないわ、けどただ私は暇なだけなんだよ」

「じゃあ一応聞いておくけど、彼氏とかつているの？」

このことについては前々から興味はあつた。ただ聞くタイミングなかつただけだ。

「彼氏？ああ、彼氏ね。私はいないよ、人と合わせるの苦手だからけど、あつちが私に合わせてくれるなら付きあうんだけどね」

「へえ、そうなんだ」

それは僕からすれば驚きだった。なぜならば姉はとても奇麗だからだ。あくまで僕の視点だが。

「じゃあ聞くけどついでに聞いておくけど。今狙つてる人とかいるの？」

ついでというより正直なところそれが本題であつたのだが。

「狙つてる人ねえ・・・特にいないかな。別にそう言う人いたつてどうにもならないし」

どうも姉は普通の女子大生とは少しずれているようだ。

しかし姉に思い人がいないのは驚きだった。本当にいないのかは定かではないが。

「そうなんだ。ていうかもう食べ終わったんだ」

姉はいつの間にかビックマックを全て食べ終わっていた。

それに比べて自分は今までの話に気をとられていてまだ1つ目を食べ終えたところだった。

「あんた遅いね。もう帰っちゃうよ」

姉は席を立とうとする仕草を見せた。

「ちょっと待って、すぐ食べるから」

僕は慌てて2つ目のハンバーガーを口に運んだ。そのせいで口元に赤いケチャップが付いてしまった。

「慌てすぎだよ。まだ行かないからゆっくり食べな」

「ごめん」

僕はその後ゆっくりハンバーガーを食べ始めた。ゆっくりといてもハンバーガーは4、5口程度で食べ終わってしまった。

「じゃあ食べ終わった事だし、そろそろ行こっか」

「そうだね」

僕はトレイに乗ったゴミを捨てるべくゴミ箱に向かった。トレイを傾けるとハンバーガー包んでいた残骸はゴミ箱に吸い込まれていった。

「じゃあもう帰ろっか」

自動ドアが開いて僕達は店の外に出た。外は変わらず人でこった返っていた。

「「ただいま」」

家に帰ると僕と姉は同時に帰りを告げた。

「おかえり」

ドアを挟んだ遠くのリビングから小さく声が聞こえた。

「よし、じゃあ早速試し弾きでもしようかな」

僕は先ほど買ったエフェクターを持って2階に向かった。姉も僕に続いて階段を上がってきた。

「じゃあ暇だから、それでも見てようかな」

僕の後ろにいる姉は僕の部屋に付いてくるようだった。僕の部屋に。「いいよ、別に。けどまだ練習も何もあつたもんじゃないからまともな曲は聞けないよ」

「そのときはメタル系でも聞かせてね」

自室の扉を開けるとやはり姉も続けて入ってきた。そして僕は姉が部屋に入った後に扉に鍵を閉めた。

「じゃあ、簡単にセッティングしてと・・・」

「ちゃっちゃとやっちゃってね」

それには少し怒りたくなつた。ヴァイオリンの奏者なら完全に激怒するだろう。それは偏見か。

「はいはい」

僕は手慣れた手つきで黒いシールドをアンプ、新しく買ったコーラスのエフェクター、ディストーション、ギターの順で繋いでいく。

「よし、終了」

姉は僕のベッドで寝転がり、携帯や財布を枕元に置いた。姉が横になる時に髪をかきあげる仕草がとても色っぽく見えた。

「じゃあ適当になんかやって」

姉は僕と反対の方向を見ながら手を振った。つまり僕の手元は全く見てないという事だ。

「なんかやってって・・・まだそう言う曲練習してないからできないんだけどな」

そう言いながら簡単なコードを押さえてギターの弦を鳴らす。厚みのあるクリーンな音がアンプから流れた。

「だからメタル系やってよ」

姉ははゴロンと転がりこっちを見つめてきた。慌てて僕は視線を軽くそらした。

「しょうがないな・・・けど人に見られながら練習するのも嫌だからそっちやろうかな」

僕はコーラスの電源を落してディストーションのペダルを踏んだ。ペダルを踏み込むと先程と違って変わって歪んだ音がアンプから流

れた。

「じゃあ適当に頼むよ」

適当に流す姉に対して、僕は簡単なリフを弾いた。

「ネックベンド、ネックベンド」

姉が僕のトラウマを口にした。

まず最初にネックベンドというものはネックを無理やり曲げて音程を変化させるハイリスク・ノーリタンの荒技だ。

何故その単語がトラウマになっているのかと言うと、

僕が高校2年生の頃に文化祭のイベントで調子に乗ってネックベンドを行なった時に力を入れすぎたためかネックが折れてしまったからだ。

さらにそのライブは台無し、ギターも粉碎され最悪の過去となった。

「もうあれはやらないよ。あれのせいでギターと人の信頼を失ったからね」

「あつ、ごめん。そこまでへこむのか・・・」

姉に言われたように僕の顔には不気味な笑みを浮かんでいた。

「まあ普通には弾いてあげるから・・・ハハ・・・」

僕はやけくそになってギターを弾き鳴らした。しかしそれはすぐに終わり、僕は手を止めた。

姉がきよとんとした顔を見せた。本能と言うのは困ったものだ。

「ねえ、ゆきねえ・・・」

「ん？なに」

姉がまた僕を見つめてきた。

「えつとね・・・」

「何、早く言つてよ」

姉は軽く笑って見せた。

僕はギターの音を消さない状態でスタンドにストンと置いた。そして姉のベッドに近づく。

「そんな怖い顔してどうしちゃったの？ていうかギターは放置していいの？」

ギターは不協和音を部屋中に反響させていた。僕は姉の寝転がっているベッドのすぐ横に立ち姉を見おろした。

「今ギターはいいんだ。それよりもさ……」

僕はベッドの真ん中あたりに腰を掛けた。

「それよりも……何？」

僕はゆっくりとした動きで姉に跨またがった。姉がびっくりして一瞬体を震わせた。

「え、将ちゃん何やってんの？ほら早く降りてよ、重いじゃん」

姉が苦笑交じりに僕をどけようとした。しかし僕は微動びどうだにしない。

「そういえばさ、さっきマツクにいた時ゆきねえ言ってたよね。500円が欲しいって」

姉は少し考えるそぶりを見せて言った。

「……そういえば言ったね、それがどうしたの？」

顔が軽く引き攣こった姉が尚も僕をどけようとする。

「じゃあ500円上げるからその分簡単な労働でもしてね」

口元が笑っていた僕であったが完全に目が笑っていない。

「え？どういう事、それって……」

姉が質問してくるものだから僕は行動を示した。

「こういうことだよ」

僕はベッドに倒れこみボタン付きのシャツの上から姉の胸を揉んだ。

「きゃっ！？なにをするの？やめて」

僕は姉の言葉が耳に入っていなかった。ただ欲望のままに姉を蝕くんだ。

「やめてって言うてるでしょ！」

姉が叫ぼうと防音工事をなされたこの家では誰に耳に元届かない。

それが届くのは同じ部屋にいる僕だけだ。

しばらくの間姉の胸を揉みしだいた僕は姉の股間の辺りに手を這はわせた。すると姉が「キャッ」という声を出した。

「ねえ将ちゃん。今止やめるなら怒らないから。お父さんとお母さんにも言わないからさ」

そう言いながらも、ものすごい力で僕をベッドから落そうとしていた。

姉の抵抗は虚しく、男子高校生の力には及ばない。僕は姉のジーンズのベルトに手をかけた。

「キャアツ、やめて！」

ベルトを外し終わるとホックに手を掛けてジーンズを姉の膝のあたりまで一気にずり降ろした。

僕は白のショーツの上から姉のソレをまさぐった。

「怒らないからさ。やめてよ・・・」

姉の抵抗がだんだんと弱くなっていくのが分かった僕は、姉のボタンの付きのシャツを無理やり引っ張り胸をさらけ出した。

僕は姉の胸に舌を這わせた。

「あっ・・・」

姉の体がビクンと反応した僕はそれを見かねてさらにその行為を続けた。

坂道を転がった石は誰に止めることができない。別の誰かが手を差し伸べなければ・・・しかし、それを止めるべく人は現れなかった。徐々に加速していった石は最後には坂の最後に到達し、動きを止めた。

その後、姉は結局誰にもその事を話さなかった。私の将来を考えてだろうか？

いや、そうではない。ただ私が怖いだけなのだ。

そして姉は長い間心を閉ざして部屋に引き籠った。だがそれも2ヶ月で幕が閉じた。

だからこの事は誰にも知られていない。親友、親戚、そして両親にもだ。

これが私が犯した人生初めての過ちだ。

第8話…とある過去の過ち（後書き）

今回は今までと比べると結構長い話になりました。

そして表現がまずい方向に転がってしまった。

どのあたり出来ればいいか分からなかったですが、うまくまとめられて良かったです。

というところで今回もここまで読んでくださいますか、本当にありがとうございます。

第9話：真実へのカウントダウン

私はいつものように白雪と共に変わらぬ休日を過ごしていた。

「白雪、最近連れてきた友達に名前は付けたかい？」

今いる場所は白雪が大半の時間を過ごしている畳の部屋だ。

辺りはたくさんのぬいぐるみが散らばっており、その真ん中には毛布の上に座ってぬいぐるみと遊んでいる白雪がいる。

「うん！えつとね、ゆきちゃんっていうの」

白雪は足元にあったカピバラのぬいぐるみを持ってそう言った。

カピバラにゆきちゃんというネーミングセンスはどうかと思うが外の世界を知らないのでは仕方のない事だ。

そもそもカピバラという動物自体、認知度が低いものだから尚更なのだろうか。

それにしても、ゆきちゃんか・・・自分の名前からそう付けたのか。このカピバラとゆきねえを重ねてしまう自分がいる。名前が似ているというだけなのに。

ふと思う事がある。ここにいる白雪と私の姉であるゆきねえがもし仮にも会ってしまったらどうなるのかと。

ゆきねえは一体私をどうするのだろうか。

警察に通報するのだろうか？それとも今までの恨みを晴らすために私を殺すのだろうか？

しかし、良い方向に転がることがない事は明白だ。

私が白雪に顔を向けると、白雪が何か目で訴えかけているようだった。

「パパ、どうしたの？」

どうやら白雪は長いこと沈黙していた私の事を心配してるようだ。

「あつ、ごめん白雪。ちよっと考え事してたんだよ。ごめん」

語尾に再度ごめんと付けて謝った。

「ゆきちゃん、柔らかくてかわいい」

そう言うと白雪はカピバラに顔をぐりぐりと押し付けた押しつけた。正直なところ私は、カピバラはそこまでは可愛いとは思えなかった。まだ猫の方が可愛らしいと思えた。

「そうなんだ。良かったね」

特にこれといって言う事もなかったため、私は言葉を短く切った。白雪はカピバラから顔を放して手が空いた左手で象のぬいぐるみを取って遊び始めた。

「しゅうくんも、ゆきちゃんと遊ぼうね」

床に向かい合うように置かれたカピバラと象のぬいぐるみは私には会話をしているようにも見えた。

白雪はしばらくの間、その私には聞こえない自分の中の会話に入っていた。

すると、突然トゥルルと着信音が家じゅうに響き渡った。私は白雪に「少し待ってて」と伝えて、ダイニングに向かった。

ダイニングに設置されている電話はまだ繋がっており、掛ってきた電話番号を見ると見覚えがあった気がした。

私は少しためらった後、受話器を取り耳にあてがった。

「もしもし？」

「・・・」

私がかしもしと尋ねてから少しの間があった。いたずら電話かと思いい、通話を切ろうとした矢先に小さく女の声が聞こえた。

「あの・・・」

その声につられて私も言葉を発した。

「どなたですか？」

またしばらく間があって、今度はちゃんとした返事が返ってきた。

『白雪です』

どうやら電話の主は姉だったようだ。私は軽く安堵のため息をついて気軽に話した。

「どうしたんだよゆきねえ。そんな暗い声してさ」

「……ねえ、今からそっち行つていい？」

姉のその言葉で、私は目を丸くして白雪の部屋に視線をもつていった。

「え、今から？ちよつとそれは厳しいな。今度じゃダメかな」

私は姉と白雪の再会を拒むように日にちの変更を遠まわしして頼んだ。

「ダメ……今日じゃなきゃ。大事な話があるの」

姉は真剣見を帯びた声でそう言った。しかしそのトーンは変わらず低いままだ。

「大事な話か……じゃあ、夜に家に来てくれないかな？」

あくまで白雪を姉に会わせないようにするために、私は少しでも時間を稼いだ。

「今からじゃなきゃだめなの。それと……もう家の前にいるんだ」

私は耳を疑った。そしてすぐさま窓際に移動し、カーテンの間から玄関の前を窺った。

すると、下に俯いた姉が電話の耳に当てて立っていたのだ。

「家の前に？」

私はもう出来るだけ時間を稼ぐためにゆっくりと会話を続けた。

「そう、表札の前のあたりにいるわ」

姉は少し顔をあげて表札をチラと見た。

「表札の前ね……あっホントだ」

そう言うのと姉の疲れ切った顔が私のいるカーテンに向き、私と姉の目が合った。

「だから、もう入つていいかな」

私は今自分に出来る最良の選択肢を考えていた。

「あ、うん……けど、今部屋がちよつと散らかつて……ごめん、5分ぐらいそこで待つててくれない。

終わつたらすぐに中に入れるから」

「うん」

もちろん私の部屋は散らかつておらず、いつものように清潔であつ

た。

しかし今考えられる時間の稼ぎ方はその程度しか思い浮かばず、姉から得られた時間はたったの5分だった。

私は「切るね」といい電話を切り、すぐさま白雪のいる畳の部屋に向かった。

部屋の中に入ると白雪が未だにぬいぐるみを使って遊んでいた。

私は表情を出来るだけ笑顔にした。しかしそれは引き攣った笑顔だったのかもしれない。

白雪がキョトンとした表情で私を見て、ぬいぐるみを動かしていた手を止めた。

「いいかい白雪、少しの間この部屋を出ないでくれ。それと静かに遊びなさい」

白雪は返事を返すわけでもなく変わらぬ表情でうんと頷いた。

「白雪、トイレは平気かい？」

私は白雪の向かい側にあるトイレを指さして言った。

手にぬいぐるみを持った白雪は同じようにうんと頷いた。

「そうか、じゃあ静かにしてるんだよ」

私はそう言って白雪の部屋の扉を閉ざした。

時計に目をやるとちょうど5分が経とうとしていた。

私はいかにも急いで掃除をしたかのように、玄関の扉を勢いよく開けた。

まだ寒さの残る外の空気と共に、姉は無言のまま家の中に入ってきた。

私もその異様な空気を察し、無言で姉をダイニングへと連れて行った。

スタスタとダイニングへと付いてきた姉は、私に何を言われる前に椅子に黒いコートを掛けて座った。

私がお茶を入れるためにお湯を沸かし始めた。

誰もしゃべらないこの空間で私は急須から湯呑にお茶を注いでテーブルに持っただけとしようとした。

しかし、その沈黙は姉が重たい口をあけてを破られた。

「将ちゃん・・・私ね、妊娠したみたい」

私はびつくりして両手に持っていたお茶を落としそうになった。そしてそう言った姉のお腹を見た。

まだお腹は大きくなっておらず妊婦と言える感じではなかった。

「妊娠・・・いつ分かったんだ？」

私は湯呑をテーブルに置いて出来るだけ冷静にそう言った。

「ええと、なんか4日前ぐらいに生理が遅れてるなって思ったのね。それで前に将ちゃんとしたことがあったじゃない、

それでもしかしてって思って妊娠検査薬を買ってきて試したんだけど。結果が陽性だったの」

姉は右へ左へ目を泳がせながらそう言った。

「妊娠何週目ぐらい分かるか？」

良く考えれば分かるような事を私は聞いた。あくまで冷静に見えるのは外の自分の身だ。

「よくは分からないけど、たぶん9週目ぐらいだと思う」

言われてみれば私が姉とした日からそのぐらいに時間が流れていた。私は深刻な表情をして口を噤んだ。

「どうして妊娠しちゃったのかな、あの日は平気だと思ったのに。」

しかも、将ちゃん」

姉はまだ大きくなっていないお腹をさすりながら、無機質な声でそう言った。

「どうしたらいいか分からないよ・・・」

姉は顔の前に手を持ってきて泣くそぶりを見せた。しかし目をからは涙は流れておらず、頬を伝うものは何もなかった。

「で、単刀直入に聞くけど・・・その子はどうするの？ゆきねえ・・・」

私は姉のおなかに視線を投げかけて言った。またもやしばらくの沈

黙が流れた。

沈黙に耐えられなかった私はそれを破った。

「ゆきねえ・・・その子を産むの、それとも中絶するの？」

あまり言いたくない言葉ではあったけど敢えて私は中絶という言葉
を強調した。

「中絶・・・」

姉は何もない中空に向かってそう呟いた。今の姉の表情からは何も
読み取れなかった。

私は何も言わない姉に対していらつきを覚えて、少し声を張り上げ
た。

「何も喋らなければ決まらないんだよ。ゆきねえはどうしたいの？」

姉は少し目を閉じて何か考えるそぶりを見せた後に目を開いて自分
の気持ちを言った。

「私は・・・この子を産みたい」

「じゃあ聞くよ、この子を産んでどうしたいの？誰が育てていくの
？」

私は今ある問題点の一部を姉にぶつけた。

姉は荒んだ顔で言った。

「この子はきつと静奈の生まれ変わりなのよ。だから私はこの子を
産みたいの」

今の私には姉は少し壊れているようにも見えた。何かに取り憑かれ
ているかのように。

「何言ってるんだ。その子はその子で静奈ちゃんも静奈ちゃんだよ。
代りなんていないじゃないか」

「うるさい！この子は静奈なのよ。きつと死んで私の元に戻ってき
てくれたのよ」

姉が急に声を張り上げたものだから私はとても驚いた。

「ゆきねえ、一回冷静になりなよ！」

私が強く言い返すと姉は静かになった。

「・・・そうだよ、死んで戻ってくるなんてありえないよね・・・」

「ごめん」

「で、ゆきねえはその子を産みたいの？」

湯呑から立ち上る湯気が減って、温ぬるくなったお茶を喉に流し込んだ。

「私は、産みたいと思ってる・・・けど」

「けど？」

私はお茶をテーブルに戻した。

「この子はたぶん産めない。だってこの子の親はあなた私の兄妹だもの」

水をうつたかのように静まった家の中は、きつとある一室の人間だけしか会話をしていなかったらう。

「・・・そうだな」

「だって私はこの子に辛い思いをさせたくないもの。・・・だから私はたぶんこの子を墮ろすと思う」

初めて姉がここにきてちゃんとした意見を言った。

「じゃあその子は墮ろすんだな。それでいいんだな？」

私はあくまで非情に念を押した。

「ええ・・・また今度、整理がついたら病院に行きましょう」

姉はそう言つと立ち上がつてこういった。

「もう帰るけど、その前にトイレに行つてもいい？」

私は姉にトイレの場所を教えて行かせた。コートを羽織つた姉はスタスタと私の視界から消えて行つた。

もう姉についていく気力がない私はそこでただ座っていた。

結局こうなつちやつたのか・・・仕方ないよね。だって弟と姉の間で来た子供なんて産めないもんね。

産んだとしても周りから批判の声を浴びせられてこの子もとっても辛い思いをしちゃうから。

私だけが苦しむのなら問題がないのだけどこの子も苦しむなんて耐えられない。

そうなるぐらいだったらまだ愛情がわかないうちにこの子を……。私は弟に教えられたように廊下を歩いてトイレに向かった。教えられたところを曲がってみると右と左にドアがあった。弟には左のドアと教えられていたので私は左側の扉をあけてトイレに入って行った。

トイレを済ました私はそのまま玄関に向かおうとした。その時、前に弟が言っていたギターの話思い出した。

昔からずっとギターをやっていた弟は今でもやっているのならばとも上達したのだろうと思っていた。

そしてさっきのダイニングにギターがないところを見ると他の部屋に置いてあるのかなと思った。

前々から弟の家には興味があったので私は興味本位で目の前のドアを開けることにした。

私がドアノブに手を触れると、中から声が聞こえた感じがした。

私はその事を疑問に感じた。なぜ中から声が聞こえるのかと……。暫く考えて私は扉に耳をそばだてた。すると、先ほどよりはっきりと声が聞こえたのだ。幼い女の子の声だ。

疑問が確信に変わった。この扉の中には女の子がいると。

私は躊躇わずにその扉を開けた。扉はギイという音をたてて開いた。そして私が見た光景は、ぬいぐるみを持って遊んでいる女の子が畳の上に座っている光景だった。

「……あなたは、誰なの？」

震えた声で私はそう言った。

すると目の前の少女は明るい声でこう言った。

「私は白雪」

私には今目の前で何が起きているのか分からなかった。なぜこの家に子供がいるのか。

「白雪ちゃん？なんでこんなところにいるの？」

少しおかしい名前を口にして私は少女に近づいた。

「なんで?・・・」

少女はきょとんとしていて質問の意味を考えていた。どうやらよく分からなかったようだ。

「新しいお友達?」

少女は意味が分からないことを言った。今度は私がよく分からなかった。

「新しいお友達!」

そう言いながら目の前の少女は私に飛びついてきた。本当に今何が起きているのかよく分からなかった。

「え?ちよつと、どういうこと?」

私はとりあえず弟のいるリビングに行くことにした。

体を180°回転させてリビングに歩こうとすると少女が私のコートの裾を引っ張った。

「白雪、行く」

ぬいぐるみを持った少女はそう言って口を噤んだ。

私は少女が後ろにくっついてきているまま弟のいるリビングに歩いて行った。

はぁ・・・そろそろゆきねえも帰ったかな。とりあえず、白雪を見に行こうかな。

私は椅子から立ち上がって廊下に出るために開き戸のドアノブに手を掛けようとした。

その時、自分がドアノブを回したわけではないのにドアノブが回った。つまり自分の以外の誰かがドアノブを回したということだ。

今考えられる人物は姉か白雪だけだが、これが白雪でないことは確かだ。

つまり、今扉を挟んでの前にいる人物は姉という事になる。

私は扉が開く前にぶつからないように距離をとった。

そして扉があいて目の前にあった光景は・・・。

なんと目の前には姉とその実の子供である白雪がいた。とたんに私の顔から血の気が引いていくのが分かった。

「ちよつと、これどういうことなの？」

姉が白雪を自分の前に引つ張って言った。

「えつと、その子はね・・・」

私は出来るだけ平静を装って会話しようとした。だが顔が青ざめているのは自分でも分かった。

「だから誰なのよ？」

「その子はね・・・言いづらいんだけどさ」

最善の答えを頭で駆け巡らせた結果、この答に至った。

「実は・・・バツ一の子持ちなんだよね。黙っててごめん」

嘘をついたからにはその言葉を真実にしなくてはならない私は次の言葉を考えた。

「それ本当？」

姉は疑いの目を強くした。

人は嘘をつくとその証拠をたくさん相手に伝えようとするものだ。

「本当なの？じゃあこの子の名前は何？」

私は姉の隣にいる白雪をチラと見て言った。

「その子は白雪っていうんだ」

「白雪？珍しい名前ね」

姉は自分の裾を引つ張ってる白雪の手を取って頭を撫でた。

「じゃあこの子の母親はどこ行ったの？」

「それは・・・」

その質問を考えていなかった私は、頭をフルに回転させた。

「あんまり言いたくないんだけど、その、言い争うになつてさあ・・・」

出来るだけあり得るような離婚原因を述べた。

姉は納得しきれていないようだったが、先程と比べると疑問の色が晴れてきた気がする。

「そうなの・・・じゃあ念の為に父さんに訊いてみるわ」
そう言っていると姉は後ろのポケットから携帯を取り出して手早く電話をかけた。

今ここで姉が父に電話をかけるとすべてがここで分かってしまう。
つまり、今まで私がやっていたことが水の泡になり一人寂しく刑務所暮らしが始まることになる。

私はそれを避けるために今自分が出来る事を考えた。
まず最初の思いついたことが、今ここで姉を殺して死体を隠す手段だ。

しかし、その方法ではすぐに足が付いてしまい結果は同じになってしまう。

次に思いついたことが父には何も伝えていないで産んだ子供で妻は蒸発してしまつて消息が分からないということだ。

まだこの方法ならば実行可能かもしれない。だがこれも成功する確率は低い。

「もしもし、父さん。今将太の家にいるんだけど、将太って・・・え？今からこつちに来るって？

なんで、父さん・・・あ、切られた」

「どうした？」

「えっ、なんか父さんがここに来るって。理由は分からないけど」
姉は携帯を元入れてあつたポケットに戻した後、肩をすくめてみせた。

私は、今この状況で父がここに来る事に驚きを覚えた。なぜ急にそんな事を言い出したのか、

姉とのやり取りに頭を使っている私には分からなかった。

「じゃあ私はまたそこで座ってるから」

そう言っていると姉はいつも白雪が座っている椅子の腰を掛けた。

「とりあえず待ちましょう」

そう言つて、姉は私が下げるのを忘れていたお茶を飲んだ。

私は白雪をソファに座らせ、父親が家に来るのを待った。

父親が来るまでは姉は一切喋らず、この空間で声を発していたのはあどけない声の白雪だけだった。

私は相槌を打っただけでまともな会話をすることができなかった。

そして、真実へのカウントダウンが刻一刻と迫ってくるのであった。

第9話：真実へのカウントダウン（後書き）

さて、このお話も次で最終回になるかと思えます。

そんなことで「楽しみにしてください」とは言えませんが、頑張って書きます。

そして試験が1週間切りました。そちらも頑張りますので、次回の更新が少し遅れるやもしれません。

という事でまた会いましょう。

第10話：最後の告白

1

私は今まで父親を殺す術^{すべ}だけを考えていた。

小、中、高校生を通してその術を考えた拳^{こぶし}、私はたくさんの殺害方法を思い付いた。

ありきたりで絶対に誰がやったのか分かるような殺人。または誰も気づかれない完全犯罪。

そして何度もそれを実行に移そうと試みた。

しかし、結果はいつも失敗。必ず最後には理性が邪魔をして父親を死に至らしめる事ができなくなる。

そんな事を延々と繰り返し返して、いつしか私は大人になっていた。

しかし大人になった今でも父親への憎しみは消える事がなかった。

憎しみというよりも、ただ殺人に興味があっただけなのかもしれないが。

だが、転機は訪れた。

なんとあんなにまで殺したくて仕方がなかった父親が死んだのだ。

私の前ではたりと倒れて……。

死因は脳に血栓が原因となった脳卒中。

父親が大のタバコ好きでかなりのヘビースモーカーだった。

きっとそのタバコが原因で死に至ったのだと思われる。

話によると喫煙者と吸っていない人では脳卒中になる確率が4倍も違うらしい。

そして、あれほどまでに殺したがっていた父親が死んだわけだが、私に残ったのは虚無感だった。

父親が死んだことに対してはスッキリするどころか何も得られなかった。

今までの目標を達成したのにも拘らず幸福や快感は訪れなかったの

には意味があつたのかもしれない。

今となつてはそれは分からないことなのだが。

だがそんな虚無感の中から一人の女性が私に手を差し伸べてくれた。その女性はとても優しく幼いころ私が見ていた母親に似ているような気がした。

そして長いことその女性と付き合つてから、いつしかめでたく婚姻届を出していた。

その日々はとても楽しかった。きっと今までの人生と比べると天地ほどの差があるのではないかというぐらいだ。

単に父親がいなくなつたからというのもあるのかもしれないがとても幸せだつた。

そんな幸せの中、私たちに朗報が舞い降りた。なんと妻が子供を妊娠したのだつた。

私はその事にとても歓喜した。妻も当然その事に喜び私たち夫婦の中は深くなり一方だつた。

しかし、妊娠6週を越えたあたりから赤ちゃんの心拍が確認できなくなつてしまつた。

妻のこの症状は、医師の診断によると稽留流産けいりゅうさんというものらしい。稽留流産というのは、赤ちゃんが死んでしまつているのに、子宮の中に留まつて出てこない状態の事を言うらしい。

そして妻は泣く泣く子供を外に出すために子宮内容除去手術を受けました。

きっとその子供はまだ人の形をなしていなかつたのだと思われた。だが、どんな姿形をしていようとそれは紛れもなく私達の子供だつた。

しかし、一度死んでしまつた者は還つてこない。これは誰から見ても明白だ。

そのため私達はもう一度だけ赤ちゃんを産もうと決意した。

私達はその間、出来るだけ笑顔の絶えない家庭を作つた。

そして、見事に妻は新しい命をお腹に宿したのであつた。

結果、またもや赤ちゃんは稽留流産。医師が言うにはこれは体質だ
そうだ。

妻はひどく悲しんだ。もちろん私もだ。

私は妻に体外受精を勧めたが、妻はそれを断固として拒否した。

そんな今にも崩壊寸前な状態がしばらく続いたある日。

家をしばらく出ていた妻が帰ってきたのだった。

二人の赤子を連れて・・・。

妻に訊くと「私の子供だ」というだけで他に何も言わなかった。

どうやってその子供を連れてきたのかは分からなかったが妻は警察
に捕まることはなかった。

そしてその二人の赤子はすくすくと成長していった。

そう、その男の子と女の子の子供はすくすくと

2

そしてだいぶ時間が経った頃に家の中にチャイムが響き渡った。

「来たみたいだね、父さん」

姉はずっと変わらない表情のまま椅子の腰を掛けていた。

私は白雪をダイニングに残して玄関へと向かった。

玄関の扉には狭いスモークガラス越しに人影が見えた。体格から言
って父で間違いないと思われる。

私は迷わずに扉を開けた。

そこにいたのは黒い鞆を持った父だった。父は何故か神妙な表情を

しており、いつもと違った様子だった。

「久しぶりだな。将太」

父は手を軽く挙げて言った。

「久しぶり。父さん」

私は出来るだけ表情を柔らかく返事をしたが、玄関にかかっている

鏡に映る自分の表情をどことなく引き攣っているようにも見えた。

「とりあえず入ってよ」

私は父に靴を脱ぐように促して父を家に迎え入れた。

「お邪魔するよ」

そう言うつと父は礼儀正しく靴をしっかりと揃えて立ち上がった。

「ゆきねえは奥にいるから」

視線をダイニングに一瞬持っていて言った。

「そうか」

父は軽くしわがれたような声で短く言葉を切った。

「えつと、じゃあ・・・行こうか」

私は姉と白雪のいるダイニングにゆっくりとした足取りで歩いて行った。

父も同じような歩幅で後ろから付いてきた。

そして私はダイニングの扉を開けて中に入った。

とうとうこの時がやってきてしまったのかと思いつつも周りを見渡した。

部屋の中には変わらず姉が椅子に腰を掛けており、白雪は私が新しく買ったカピバラの『ゆきちゃん』と遊んでいた。

「父さん・・・」

姉はそう言うつと私の方に視線を向けた。しかし視線は私ではなく、私の後ろにいる父に注がれていた。

「深雪か」

「じゃあ父さん、そこに座ってて」

私は部屋の壁際にもたれかかって、父は鞆と共にソファに腰を掛けた。

そして姉は堰を切ったかのように話し始めた。

「じゃあ訊くけど、父さん。将太は私が知らないうちに結婚してたの？」

如何にもストレートな訊き方だった。しかし、それが一番疑問になっているのだから仕方ない。

「・・・いや、将太の結婚は何も知らない」

父のゆっくりとした返事が終わった後、姉はきつい目つきで私を睨んだ。

「どういうことなの？説明して」

私は出来るだけ考える素振りをしないように答えた。

「・・・父さんに黙ってたのは本当にすまないと思ってる。けど・・・」

「けど、何なの？」

「けど・・・けど、本当にこの子を産んで良かったと思う」

嘘の演技。何も分からない私にはそんな事は何も分からない。

「はぁ？あんた何言っているの。子供に愛情をかけるのは当たり前でしょう。」

それを・・・それを奪われた私はどれだけ悲しんだと思ってるの！怒りに身を任せている姉に対して、父は物静かに座っていた。

「・・・」

私は姉に気押されて黙ってしまった。

「父さんになんか言つてよ」

姉がそう言つと父は重たい口を開いた。

「なあ・・・私がここに来た理由が分かるか？」

父と私を見た姉は眉をひそめた。

「父さんも何言ってるの？」

父は自分の前で手を組んで下の方を見ていた。

「分かるわけないな。じゃあ順を追って説明しなければいけない」

「だから父さん何言ってるの」

私は姉に止められているかのように何も喋れなかった。

「お前たちに言わなければいけないことがあるんだ」

また部屋の中がしんと静まり返った。聞こえる音は白雪がカピバラを動かす音だけだ。

「何？」

「それはだな・・・」

父は少し間をおいた。その時間がやけに息苦しく感じられた。

「お前たちの親の話なんだが」

私は姉に代わって話し始めた。久し振りに話した私の喉は乾いて少し痛かった。

「お前たちの親って・・・父さんでしょ、何言ってるの？」

話がよく見えなかった。これは姉にも言えることだろう。

「実はな・・・お前たちの親は私じゃないんだよ」

一瞬の間思考が停止した。だが次第にその言葉の意味が頭で処理されていった。

「・・・どういう意味？」

私がそう言おうとする前に姉が父に言葉を返した。

「そっだよということだよ」

やはり私も姉に続いた。そして父は今まで重たかった口が嘘のように話し始めた。

「今お前たちの居場所にいるべき将太と深雪は・・・母親から生まれる前に死んでいるんだよ」

「え・・・何よそれ？」

「父さん、言ってる意味が分からないんだけど」

そんな異様な空気を察してか、白雪はトタトタとダイニングを出て行った。

今はそれどころではない私は何も言わずに白雪をそのまま行かせた。

「お前たちは、母さんが拾ってきた子供なんだよ。正確には誘拐してきたというのが正しいんだがな。」

だからお前たちの両親は別の誰かなんだ」

「ゆう・・・かい？」

姉が目を丸くして震えたような声で呟いた。

私の方はというと、別の意味で衝撃を受けていた。

自分が本当の子供ではないという事にはあまりショックは受けずに、ただ・・・

とうの昔に誘拐は始まっていたのだなという事に驚いた。

つまり私がこうやって今、姉の子供である静奈を誘拐して白雪として育ててきたのは私が誘拐された子供だから。

しかし、そんな事はただの戯言だ。結局誘拐したのは自分であって、それを人なすりつけられるわけではない。

「そうだ。だから父さんではないんだよ私は」

「うそ・・・そんなの嘘・・・」

姉は体を震わせていて、目が潤みはじめてきていた。

そんな父の告白から私は一つ疑問に思った事があった。さっき言葉だ。

何で父はさっき「私がここに来た理由が分かるか？」と聞いたのだろうか。

今の私にはこの事を言うために来たのではないように感じられた。

「それが、父さんがここに来た理由・・・か・・・」

私は不思議な関係で繋がれた自分を含めた3人に視線をやった。

「・・・いや、まだもう一つある」

涙を必死で耐えている姉が父の姿を見た。

「もういい・・・もういい・・・」

私は無表情で父の言葉を待った。

「じゃあ訊くが、なんで母さんは死んだんだ？・・・母さんというのはお前たちからすれば偽の母を指すんだがな」

父は余計な言葉を付け加えた。そのせいで姉が堪えていた涙がこぼれおちて、頬をつつと濡らした。

「それは事故で・・・」

私が言葉を言い終らないうちに父が口を挟んだ。

「事故じゃないんだ。あれは事故じゃ」

この言葉にはさすがの私も耳を疑った。しかし父の口調は同じままだ。

「あれはな、事故じゃなくて狙って起こした事なんだ。順を追って説明するとだな」

父は饒舌に語り始めた。

「私はある運転手に頼んだんだ。私の妻を事故に見せかけて轢いてくれた。」

その運転手は金に困っていてな。だから私は妻を殺す事が出来たらその運転手の銀行に金を振り込んでやると言ったんだ。

そうするとそいつは簡単に私の依頼を引き受けてくれた。そして私は約束通り金を振り込んだ。

そいつは事件が起こる前に言ってくれたよ。「ありがとうございませう」とな。

そしてあの大事故は起きた。・・・これがあの事故の真相だ」

そう言つと父は鞆を膝に置いてチャックを開けようとした。

「なんだよ・・・それ。なんで母さんを殺したんだよ」

「何を言ってるんだ。お前たちの母親ではないんだからそんなに怒る必要はないだろう」

父は呆れたよう言った。

「じゃあなんで殺したのかは言ってくれよ」

「そうだな・・・それだな。あの人がもういない子供の幻影に縋すがっているのが、見ていられなくなった・・・

と言つた方が納得するか？」

父は全く反省しないような口ぶりでそう言った。

「この・・・野郎！」

私は目の前にいる男に一発拳を見舞うために殴りかかろうとした。しかし、ある物が私の動きを止めた。

「これで、私がここに来た理由が分かったか？」

父は鞆からおもむろに刃渡り20cm以上はありそうな包丁を取り出した。

「さっき言ったこともあながち間違いではないんだぞ。私はその幻影を消しに来たんだから」

先程まで泣いていた姉は、途端に姉は顔を引き攣らせて椅子から飛びのいた。

「やめるよ・・・」

私はゆっくりと父から後ずさった。同時に父は腰あげて銀色にキラリと光る包丁を突き出した。

「すまん、だけど死んでくれ」

父はゆっくりと私に近づいてきた。すると、姉はテーブルに置かれている箸を入れる箱を父にぶん投げた。

「殺されるもんですか、今あんたが死んでも正当防衛で私達は罪にならないだからね」

箸入れが見事に右手に命中したため、父は左手で当たったところを押さえた。

その隙を見計らって、私は父から距離をとった。

「あまり暴れないでくれ・・・私もお前たちについていくから」

そう言うとうちはまたゆっくりとした足取りで私達との距離を詰めていった。

その間に姉はしかしに入った台所から包丁を持ってきた。

「・・・正当防衛よ、罪にならないの」

姉はそう繰り返して包丁を腹辺りで構えて私の前に立った。父との距離は残り4メートル。

「深雪、それを下せ^{おろ}」

父はそう言いながらも徐々に距離を詰めていった。距離は3メートルまで縮まった。

「いや。そうじゃないと・・・そうじゃないと」

次の瞬間、姉は包丁を構えたまま奇声を上げ父に突っ込んでいった。

「うわああああああああああ」

秒に換算すると、とても短い時間だが父にたどり着くまでの時間はとても長く感じられた。

その長く感じられた時間。私は自分が死ぬわけでもないのに頭の中では走馬灯が駆け巡っていた。

姉と楽しく買い物に出かけた記憶。父と男の秘密と称して遊びに行った記憶。

家族4人、テーブルを囲って一家団欒で幸せに食事をとる記憶。

しかし、それは全て嘘偽りであって真実でも何物でもない。
ただ私の走馬灯は幻想という名の偽りの記憶を蘇らせて砕いていっ
たのであった。

必死に形相で父に駆け寄り姉。それに驚いて同じく包丁を構える父。
そしてそんな光景を無表情で見つめる私。
そして数秒後、鈍い音が部屋中に響き渡った。

3

「・・・パパ・・・パパ、どうしたの？」

白雪が私の肩を叩いている。

「この人たち何してるの？・・・壊れちゃったの？」

白雪は心配そうな顔で私を覗き込んだ。

「壊れちゃったんなら、パパ直してよ。パパはなんでも直せるもん
ね」

私は足元に横たわっている二つの死体を見下ろして言った。

「白雪・・・パパも直せないものはあるんだよ」

白雪は半信半疑な表情で頷いた。

姉が父に突っ込んだ後、まず初めに姉の包丁が父の腹部に刺さった。
しかしその一撃は即死には至らず、まだ父には意識があつた。

腹部に包丁が刺さった父は血を流して呻きながら自分の持っていた
包丁を姉に突き刺した。

執念深いとはこの事を言うのだと思った。すると姉と父は床に倒れ
た。

二人とも既に虫の息だった。そして姉は私に救急車を呼ぶように頼
んだ。

だが私はそんな事はしなかった。ただその二人を見ているだけだ。
二人の意識がだんだん薄れていくのはその時の私にはよく分かった。

そしてどくどくと血が流れて床を真っ赤に染めていく二人に向かってこう言った。

「ありがとうね父さん。それと・・・ゆきねえ、僕も隠し事があるんだよ」

姉は薄れていく意識の中、必死に手を私に向けようとして助けを求めていたが、もちろんその手は上がらなかった。

「あの子供はね、ゆきねえの子供の静奈ちゃんだよ」

姉は体をビクンと震わせて私を睨んだ。その眼には殺気が籠っており、姉の全てが注ぎ込まれているようにも思えた。

そして、二人は息を引き取った。しかし死んでもなお、姉は私を睨み続けていた。

そして私は白雪を誰にか見つからない場所に移動させ、警察を呼んだ。

私は警察署に行き事件の内容を喋った。

私達が誘拐された子供だったこと。父が母親を事故に見せかけて殺したこと。

そして父が私達を殺そうとしたこと。

やがて私は警察署から解放された。そして私には罪は下りなかった。ただ、大々的にニュースでその事を報道されてなんどもテレビの前に顔を出させられた。

そのため私の名前がさまざまな人に知れ渡った。

しかし私の本当の両親は現れることはなかった。もしかしたら死んでいるのではないかと思ったが別にどうでもよかった。

そして月日が経つことに私は世間から話題にされなくなっていった。それからさらに長い年月が経っていった。

高校生ぐらいの一人の少女が私のアレを淫らに啜えている。

少女の口から唾液が垂れて私のアレを濡らしてテカテカと光らせた。舌を慣れたようにアレに這わせている少女は途切れ途切れの声で言った。

「パパの・・・おいしいよ・・・もっと・・・気持ち・・・よくなってね」少女はさらに激しく頭を上下に振った。私は少し息を荒げた。

その行為に疲れた少女は、私から少し距離を取ってガバリと足を開いた。

「パパのが欲しいよ・・・」

少女は自分の秘部を優しく撫でながらそう言った。

私は少女に近づいて、愛液が垂れているピンク色をした秘部を軽くなぞった。

すると少女は喘いで体を震わせた。

「・・・はやく・・・」

私は無言のまま少女の秘部にアレを突き立てた。

すると少女は至福の笑みを浮かべて腰を動かした。

「ねえ、パパ。もっと気持ちよくなるうね」

そう言つと少女は「あっ」と喘いだ。私が強くアレを押し込んだからだ。

普通ではありえない関係。親と子の行為。

しかし、私達は親子ではないのだ。だからこの行為は誰にも咎められることはない。そう、誰にも。

「そっだね。もっと気持ちよく・・・白雪」

私は微笑して、さらに白雪と深く交わった。

第10話：最後の告白（後書き）

さて、これでこの『箱入り娘』も最終回を迎えました。

長いようで本当に短く感じられました。期間的にもちょうど1カ月ぐらいですね。

そして、最後はうまくまとめられなくてすみませんでした。その点は次回作で改善します。

それと次回作の事なんですが、たぶん私のもう一つの作品である『姉妹と静けさと音』の続編をやると思います。

たぶんジャンルは推理なのでもし気になったらよろしく願いします。

それとこのお話で思ったんですけど、やっぱり嘘などはいけないのかなと思いました。

でも、優しい嘘とかは大切ですよ（笑）

という事でここまで見てくださった方、本当にありがとうございました。

これにて、うゆのとある茶番劇を終了いたします。

2度目ですが、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9893f/>

箱入り娘

2010年10月11日21時41分発行